

富樫館跡 廻土居地区
富樫館跡 鬼ヶ窪地区

扇が丘・住吉土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

2001年

石川県野々市町教育委員会

富樫館跡 蝮土居地区
富樫館跡 鬼ヶ窪地区

扇が丘・住吉土地地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

2001年

石川県野々市町教育委員会

例 言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町属が丘及び住古町に所在する富樫館跡畑土居地区・富樫館跡鬼ヶ窪地区の発掘調査報告書である。
- 2 調査は野々市町属が丘住古土地区画整理事業に係るもので、野々市町都市計画課からの依頼を受け、野々市町教育委員会が発掘調査を行った。調査期間、面積、担当は以下の通りである。

遺 跡 名	現地調査期間	調 査 面 積	調 査 担 当
富樫館跡鬼ヶ窪地区	1996.5～1996.10	2,300㎡	田村 昌宏
富樫館跡畑土居地区 (1次)	1998.7～1999.10	2,070㎡	布尾 和史
富樫館跡畑土居地区 (2次)	1999.5～1999.9	1,500㎡	徳野 裕子

- 3 発掘調査にあたっては野々市町都市計画課の協力を得た。
- 4 遺物整理作業と報告書の作成は平成11年度から平成12年度にかけて野々市町教育委員会が実施した。報告書の執筆、編集は徳野裕子と布尾和史があたり、執筆分担は日次に記した。
- 5 発掘調査及び本書の執筆にあたっては下記の方々から御教示御指導を得た。記して感謝申し上げます。

垣内光次郎、藤田邦雄、増山 仁 (敬称略)

- 6 本書の挿図・写真図版の指示は以下の通りである。
 - (1) 遺構・地図などの方位は全て真北を表示する。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。
 - (3) 挿図の縮尺は図中に示すとおりである。遺物は1/3を基本とし、銭貨を1/2とした。
 - (4) 出土遺物実測図の各番号は、遺構図出土位置及び遺物一覧表、写真図版中の遺物番号に対応する。
 - (5) 写真図版中における遺物の縮尺は統一していない。
 - (6) 遺構名の略号は、自然河道跡・溝状遺構 (SD)、畝状遺構・落ち込み (SX)、竪穴状遺構 (SI)、土坑 (SK) とした。

- 7 本報告書に記載した遺跡の出土遺物、調査記録は野々市町教育委員会が保管している。

8 調査参加者

井手和郎、伊藤忠行、猪又邦子、井村外喜子、遠藤外茂義、大瀬戸武夫、大知時子、小幡頼三、小野幸子、木津美和子、木下光、桑本ツタ子、小松義一、小柳幹雄、田中よね子、谷口初代、田端実、袖美保子、藤部純子、徳田外喜栄、中川紀子、中川美幸、中川吉三、中黒正雄、永田芳子、西川千明、羽土啓子、橋本美智子、浜田五郎、浜野光蔵、早崎長三、東 猛、彦田洋子、前田り子、南外志雄、横山日出子、山岸吉男

9 整理参加者

竹田倫子、野村祥子

目 次

第1章	位置と環境	（徳野裕子）	1
第2章	調査に至る経緯と経過		5
第3章	富樫館跡壇上居地区	（布尾和史）	7
	第1節	遺跡の概要	
	第2節	縄文時代から古代の遺構と遺物	
		(1) 埋設土器 (2) 小穴群	7
		(3) 周溝状遺構	（徳野裕子）
		(4) SD05 (5) SD11 (6) 包含層出土遺物	
			（布尾和史）
	第3節	中世の遺構と遺物	10
		(1) SX03 (2) SX04 (3) SD04	
		(4) SD11上層、SD08、SD09、SD10、SD12	
		(5) 包含層出土遺物	
	第4節	近世の遺構	(1) SD01 (2) SD02、SD03、SD06、SD07、SD13
	第5節	小結	14
		遺物観察表	32
第4章	富樫館跡鬼ヶ窪地区	（徳野裕子）	45
	第1節	遺跡の概要	45
	第2節	遺構と遺物	45
	第3節	小結	54
		遺物観察表	55
	報告書抄録		

図面図版目次

第1図	野々市町位置図 (S=1/3,000,000)	1
第2図	周辺の遺跡 (S=1/30,000)	3
第3図	扇が丘住吉土地区画整理事業に係る発掘調査位置図	6
第4図	富樫館跡壇上居地区調査区全体図 (S=1/400)	15
第5図	縄文時代から古代の遺構 (S=1/600)	16
第6図	埋設土器 (S=1/30)	16
第7図	自然河道跡平面図 (S=1/300)・土層断面図 (S=1/60)	16
第8図	周溝状遺構 平面図 (S=1/80)・土層断面図 (S=1/40)	17
第9図	小穴群 (S=1/80)	18
第10図	出土遺物〔縄文～古代1〕 (S=1/3)	18
第11図	出土遺物〔縄文～古代2〕 (S=1/3)	19
第12図	出土遺物〔縄文～古代3〕 (S=1/3)	20
第13図	中世の遺構 (S=1/600)	21
第14図	SX04、SX03 (SX04・SD04b)、SX04 (SD04b) 土層断面図 (S=1/60)	21
第15図	畠状遺構SX03、落ち込みSX04平面図 (S=1/80)	22
第16図	溝状遺構SD04平面図 (S=1/200)・土層断面図 (S=1/40)	23
第17図	自然河道跡SD11土層断面図 (S=1/60)	24

第18図	遺構出土遺物1 (SX03: 22~27, SX04: 28~40, SD04: 41~57) (S=1/3)	25
第19図	遺構出土遺物2 (SD08: 59~61, SD09: 63~83) (S=1/3)	26
第20図	遺構出土遺物3 (SD09: 84~91, SD11: 92~105) (S=1/3)	27
第21図	遺構出土遺物4 (SD11: 106~114, SD12: 115~118) (S=1/3)	28
第22図	包含層出土遺物1 (SD01: 119~131, SD02: 132~140, SD06: 141~143, SD07: 144) (S=1/3)	29
第23図	包含層出土遺物2 (SD13: 145~177, SD14: 178) (S=1/3)	30
第24図	近世の遺構 (S=1/600)	31
第25図	SD01土層断面図 (S=1/60)	31
第26図	富樫館跡推定地	33
第27図	調査区と旧地籍図	33
第28図	富樫館跡鬼ヶ窪地区調査区全体図 (S=1/300)	48
第29図	SI1平面図・断面図 (S=1/60)	49
第30図	SD1・SD2断面図 (S=1/60)	49
第31図	SK1~SK10実測図 (S=1/60)	50
第32図	SK3・SK4・SK8・SD1・SD2出土遺物実測図 (S=1/3)	51
第33図	SD2・P1・P2・包含層出土遺物実測図 (S=1/3)	52
第34図	石製品・鉄製品実測図 (S=1/3)	53

目 次

第1表	遺跡地図凡例	2
第2表	竊土居地区出土中世遺物組成表	35
第3表	遺構の変遷と歴史年表	39
第4表	竊土居地区遺物観察表	40
第5表	鬼ヶ窪地区遺物観察表	55

写真図版目次

写真図版1	竊土居地区航空写真：調査区遠景（西から）、調査区近景（東から）
写真図版2	竊土居地区遺構1：埋設土器検出、埋設土器、小穴群（西から）、小穴群（東から）、SD02・03・04・05検出（南から）、SD05（北から）、SD05（南から）、SD05断面（北から）
写真図版3	竊土居地区遺構2：SD05（西から）、周溝状遺構（北から）、遺構検出、SX03畝間溝検出（南から）、SX03断面（北から）、SX03断面（南から）、遺構完掘（南東から）、SX03北断面（北から）
写真図版4	竊土居地区遺構3：SX04北半（北から）、SX04南半（北から）、SX04・SD04b（南から）、SX04・SD04b断面、SX04断面、SX04・SD04b断面、SX03・SX04・SD04（北から）、SX03・04・SD04断面
写真図版5	竊土居地区遺構4：SD03・04検出（西から）、SD04B断面（西から）、SD04A断面（西から）、SD04B断面（西から）、SD04C断面、SD04完掘（西から）、SD08・09・10検出、SD08・09・10完掘
写真図版6	竊土居地区遺構5：SD11断面D（南から）、SD11断面E（南から）、SD09遺物出土状況、SD09遺物出土状況、SD11（1999年度調査区）（南から）、SD11・13完掘（南東から）、SD13完掘（北から）

- 写真図版7 蝦土居地区遺構6：SD01断面C（北から）、SD01・SD11（東から）、SD01断面A（南から）、SD01断面A（南から）、SD02断面（西から）、SD02・SD06、中学生職場体験、調査風景
- 写真図版8 蝦土居地区遺物1：1～21
- 写真図版9 蝦土居地区遺物2：22～40
- 写真図版10 蝦土居地区遺物3：42～62
- 写真図版11 蝦土居地区遺物4：63～78
- 写真図版12 蝦土居地区遺物5：79～91
- 写真図版13 蝦土居地区遺物6：92～112
- 写真図版14 蝦土居地区遺物7：113～131
- 写真図版15 蝦土居地区遺物8：132～157
- 写真図版16 蝦土居地区遺物9：158～177
- 写真図版17 鬼ヶ窪地区遺構1：SI1、SK1、SK1完掘後、SK2、SK2完掘後、SK3・SK4、SK5、SK7
- 写真図版18 鬼ヶ窪地区遺構2：SK8土器出土状況、SK8完掘後、SD1、SD2、調査区航空写真
- 写真図版19 鬼ヶ窪地区遺物1：1～24
- 写真図版20 鬼ヶ窪地区遺物2：25～31

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

富樫館跡鬼ヶ窪地区、富樫館跡土居地区は石川県のほぼ中央に位置する野々市町の東部に位置する。野々市町は北と東は金沢市、西は松任市、南は鶴米町に接する東西4.5km、南北6.7km、面積13.56km²の平野部の町であるが、近年は金沢市のベッドタウンとして市街化が著しく、人口4万3千人を超える日本海側の雄町となった。これは、市街化に伴う都市計画道路の整備、各地での区画整理事業等による都市開発が急速に進んだためである。また、大型店舗の進出も伴って活気溢れる町に発展を続けている。本遺跡の所在する住吉町も例外ではなく、周辺に金沢工業大学が設置され、周囲には住宅や学生アパートが立ち並び人々が賑わいをみせており、一昔前の田園風景が失われつつある。

野々市町の大部分は霊峰白山を源流とする石川県最大の河川手取川によって形成された扇状地扇央部に位置する。調査地の所在する野々市町東部はその扇側部にあたり、東方には金沢市内を流れる早川と手取川の河岸段丘に挟まれた富樫丘陵が南北に存在している。この丘陵の後縁間を縫うようにして小河川が平野に流下し、形成された微高地上に富樫館跡鬼ヶ窪地区、富樫館跡土居地区が位置する。この微高地はそのまま北方向にも伸びており、富樫氏の本拠地を形成する大きな微高地になっている可能性が高い。



第1図 野々市町位置図
(S=1/3,000,000)

第2節 歴史的環境

富樫館跡鬼ヶ窪地区は縄文・中世、富樫館跡土居地区は中世を主体とする遺跡である。両遺跡の存在する微高地上には集落跡となる扇が丘ゴジョ遺跡(弥生、古代)、高橋セボネ遺跡(弥生、古代)が立地する。両遺跡からは縄文時代の遺物が少量ながら見られることから、当地は縄文時代より人々の営みが行われていたのであろう。続いて、縄文時代から江戸時代までの周辺の遺跡を順に紹介していく。

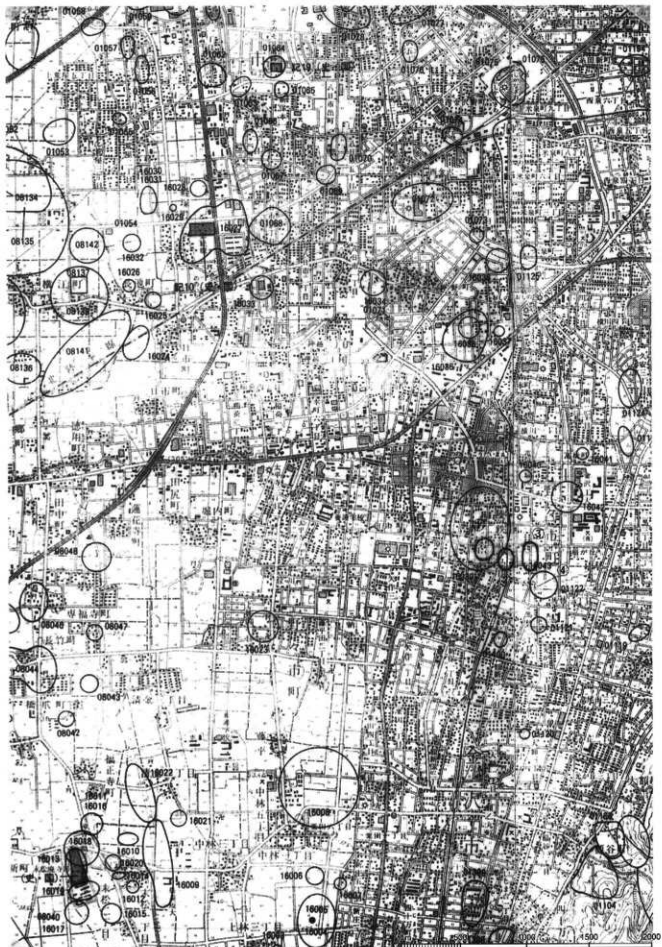
縄文時代で最も注目すべき遺跡は、御経塚遺跡、新保チカモリ遺跡、中屋遺跡で、大規模な集落が営まれていたことが確認されており、何れも北陸地方の縄文時代後晩期の標識遺跡として知られている。近隣にある、米泉遺跡も重要な遺跡として挙げられよう。こうした集落の形成には、扇状地扇端部における地下水の自噴により豊富な水を確保可能であったことがその要因として挙げられる。弥生時代には、前述した高橋セボネ遺跡をはじめとして、大小の遺跡が存在する。高橋セボネ遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡が16棟、掘立柱建物跡が5棟確認されている。押野タチナカ遺跡は中期から後期にかけての集落遺跡で、竪穴建物跡17棟、掘立柱建物跡7棟を確認した。この他にも、御経塚遺跡デト地区、押野大塚遺跡、本遺跡に近い扇が丘ハワイゴク遺跡、扇台遺跡などが挙げられ、何れも後期から終末期にかけての遺跡である。古墳時代はこの地域での存在は希薄であり、僅かな中に御経塚シンデン遺跡がある。この遺跡は弥生時代後期の集落跡と共に古墳時代前期の古墳が確認されており、方墳12基及び前方後方墳2基が確認されている。古代に入ると、野々市町南部方面でかなりの遺跡密度の集中を見ることができる。末松苑寺跡は7世紀後半の金堂、塔跡などを確認しており、現在は国の指定史跡と

なっている。この他に下新庄アラチ遺跡、上林新庄遺跡は、8～9世紀の集落遺跡であるが、大型の獨立柱建物群や塀などが確認されており、有力階層集団の居住域と推定されている。平安時代末期にはいると、庇のついた建物が増え確認された扇が丘ヤグラ遺跡が存在する。室町時代から戦国時代には、各地で城館遺跡が見つかり、本報告となる富樫館跡は、加賀国守護富樫氏の守護所で、国内の政治、経済の中心地となった所である。本遺跡周辺には「ジョウカク」「ナゴダイ」などの字名が残っており、富樫館跡存在の可能性を持っている。平成6年の調査時には上幅6m、下幅1m、深さ2.5mの堀跡の一部が見つかった。今回の調査成果も含め、富樫館跡の状況が明らかになりつつある。江戸時代は遺跡としての発掘調査は行っていないが、富樫館跡堀土居地区で近世の遺構が確認されたので記述する。本遺跡の北西約600m離れた地点には北国街道が走り、金沢城下町に最も近い宿場町として栄えた野々市村が存在する。

第1表 遺跡地図凡例

野々市町		
①	富樫館堀土居地区	01056 矢木マツノキダ遺跡 (弥～古)
②	富樫館堀土居地区	01057 欠木ヒガシウラ遺跡 (弥・古)
③	扇が丘ヤグラ遺跡	01058 上安原除橋遺跡 (弥・古)
④	扇が丘ハイゴク遺跡	01059 欠木ジワリ遺跡 (弥・古)
16003	七林テラダ遺跡 (空)	01062 藪戸住宅遺跡 (縄)
16004	上林新庄遺跡 (縄・古～平安)	01063 新保本町西遺跡 (弥・古)
16005	上林古墳 (古)	01064 新保本町チカモリ遺跡 (縄)
16006	下新庄アラチ遺跡 (空)	01065 新保本町東遺跡 (縄・古)
16007	下新庄チナガ遺跡 (空・平安)	01066 新保本町ツカダ遺跡 (弥)
16008	栗田遺跡 (縄・空・平)	01067 新保本町南遺跡 (中)
16009	末松A遺跡 (縄・平)	01068 八日市B遺跡 (縄・空・平)
16010	末松B遺跡 (弥)	01069 八日市サカイマツ遺跡 (縄・空・平)
16011	末松福正寺遺跡 (古・平)	01070 八日市ヤスマル遺跡 (縄・空・平)
16012	末松古墳 (古)	01072 押野西遺跡 (縄・空・平・奈)
16013	末松庵寺 (空・平)	01073 押野大塚古墳 (古)
16014	末松C遺跡 (空・平)	01074 西金沢新町遺跡 (空・平)
16015	法福寺跡 (?)	01075 日本たばこ金沢工場遺跡 (空・平)
16016	福正寺跡 (平)	01076 保古町遺跡 (空・平)
16017	末松岩跡 (?)	01077 黒田B遺跡 (平)
16018	末松イカシ遺跡 (空～中)	01078 占府遺跡 (縄)
16019	大飽館跡 (空～室)	01104 額谷遺跡 (古)
16020	古元堂館跡 (?)	01105 額谷ドウシツダ遺跡 (縄～中)
16021	末松信濃館跡 (中)	01106 額谷城跡 (平)
16022	清金アガト遺跡 (平～中)	01119 高尾公園遺跡 (平)
16023	三林館跡 (空)	01121 扇台遺跡 (弥)
16024	二日市イシバチ遺跡 (中)	01123 久安トノヤシキ遺跡 (古)
16025	長池キタバシ遺跡 (縄・空)	01124 久安さんまい川遺跡 (平)
16026	長池ニシタンボ遺跡 (縄・弥・室)	01125 米泉遺跡 (縄・弥・平)
16027	御経塚遺跡 (縄・弥・空～中)	01194 増泉穴田遺跡 (弥・古)
16028	御経塚C遺跡 (古)	01398 四丁方遺跡 (縄)
16029	御経塚経塚 (?)	01399 三十町遺跡 (空～平)
16030	御経塚シンデン遺跡 (縄・弥・古)	01400 馬巻遺跡 (縄)
16031	御経塚シンデン古墳群 (古)	
16032	御経塚オウシ遺跡 (弥)	
16033	野代遺跡 (縄)	
16034	上宮寺跡 (空)	
16035	押野館跡 (空)	
16036	押野チチナカ遺跡 (弥・古)	
16037	押野ウマワリ遺跡 (弥)	
16038	押野大塚遺跡 (縄・弥)	
16039	富樫館跡 (中)	
16040	高橋ウバダ遺跡	
16041	高橋セボネ遺跡 (弥・空)	
16042	扇が丘ゴシヨ遺跡 (弥～中)	
	金沢市	
01053	上荒屋遺跡 (縄～平)	
01055	上荒屋住宅遺跡 (弥)	
		松任市
		08042 橋爪松ノ木遺跡 (中)
		08043 橋爪遺跡 (縄・弥・中・近)
		08044 長竹遺跡 (縄～古・中)
		08045 乾町遺跡 (縄～近)
		08046 専福寺遺跡 (中)
		08047 高田遺跡 (縄・平)
		08048 田中ノケ遺跡 (弥)
		08134 横江荘々家跡 (平)
		08135 横江荘遺跡 (空・平)
		08136 横江ゴクラクジ遺跡 (縄・中)
		08137 横江館跡 (中)
		08138 横江A遺跡 (縄・弥)
		08139 横江B遺跡 (平)
		08140 横江C遺跡 (古)
		08141 横江D遺跡 (?)

(「石川県遺跡地図」石川県教育委員会1992に加筆)



第2図 周辺の遺跡 (S=1/30,000)「石川県遺跡地図」1992に加筆

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 経緯

富樫館跡蝮土居地区、富樫館跡鬼ヶ窪地区は野々市町扇が丘住古土地区画整理事業に伴い実施された緊急発掘調査である。平成6年2月23日に野々市町都市計画課より遺跡試掘調査の依頼が野々市町教育委員会に提出された。直ちに野々市町教育委員会が区画整理事業施行区域において試掘調査を実施したところ、富樫館跡蝮土居地区、富樫館跡鬼ヶ窪地区と扇が丘ヤグラ遺跡、扇が丘ハワイゴク遺跡の計4遺跡が存在することが確認され、発掘調査が必要であると判断した。この結果をもとに両者で協議し、平成8年度より調査を実施することとなった。

第2節 経過

富樫館跡蝮土居地区の発掘調査は第1次調査を平成10年度に、第2次調査を平成11年度にそれぞれ実施し、富樫館跡鬼ヶ窪地区は平成8年度に調査を実施している。

平成8年度調査（富樫館跡鬼ヶ窪地区）

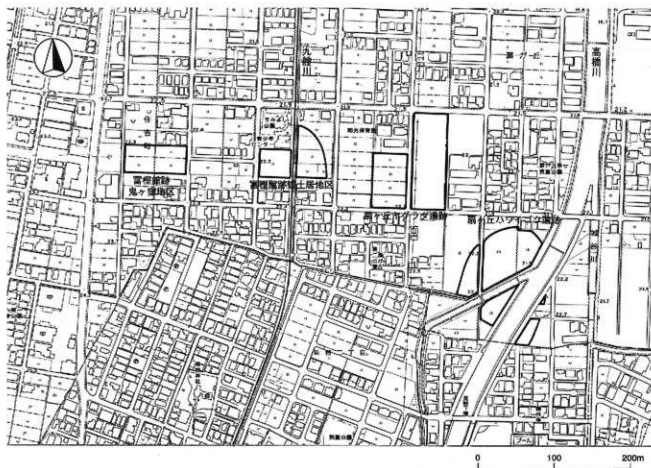
平成8年5月16日付け野々市町都市計画課より依頼を受け、富樫館跡鬼ヶ窪地区内の面積2,300㎡の調査を実施した。5月29日に表土掘削を開始し、地山面のほとんどが石原であったため検出に時間を要したが、遺構・遺物密度が想定より低く、ほぼ予定通りの9月4日に調査を終了することができた。遺構は縄文時代の土坑と中世の竪穴状遺構、溝、集石土坑を確認した。

平成10年度調査（富樫館跡蝮土居地区）

平成10年4月27日付け野々市町都市計画課より依頼を受け、第1次調査は遺跡の縁辺部にあたる約2,300㎡を調査した。5月11日より重機による表土掘削を開始し、5月13日より遺構検出を行った。調査の結果、古代以前から中世にかけての河道跡、中世のものと思われる溝跡、畝溝状遺構が確認された。調査は10月14日に終了した。

平成11年度調査（富樫館跡蝮土居地区）

第2次調査の実施面積は1,500㎡である。周辺に排土置場を確保出来なかったことから、対象面積南半分の750㎡を調査後、残りの北半分750㎡の面積を調査する形をとった。調査区設定後、5月18日に重機による表土掘削を開始し、5月26日に、遺構検出作業を行った。遺構の密度は低く遺物の出土も少なかったが、平成10年度調査で検出した河道跡が確認され、規模確認のため完掘したことで時間を要した。7月21日より残りの750㎡の表土掘削を開始し、7月30日より遺構検出を行った。北側の遺構密度も低く、河道跡の調査も中世遺物出土層のみの検出に留めたことから9月9日に調査終了した。



第3図 扇が丘住吉土地区画整理事業による発掘調査区 (S=1/5,000)

第3章 富樫館跡蝮土居地区

第1節 遺跡の概要

富樫館跡蝮土居地区では、縄文時代から弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世に至る遺物、遺構が検出されている(第4図)。

縄文時代から古代については、確実に時期が比定できる遺構が少なく、遺物が少量あるのみである。本遺跡においては、埋設土器・自然河道跡(SD05・SD11下層)・小穴群・扇溝を伴う遺構(SX17・SK18・SK19)などが、わずかに出土した遺物や覆土の状況から該期に位置づけられるものと推定される。

遺跡の主体となるのは中世であり、多数の遺物が出土しているが、遺構としては自然河道跡(SD11上層)・溝状遺構(SD04)・畝状遺構(SX03)・地山面の落ち込み(SX04)などがある。明確な建物跡などは検出されなかったものの、掘り込みの明瞭な溝状遺構(SD04)や、平面が方形に区画された畝状遺構の存在は調査区の周囲に該期の居住痕跡を伴う遺跡が存在することを予想させるものである。

近世以降の遺物が含まれる遺構には、自然河道跡(SD01)・溝状遺構(SD02・SD03・SD06・SD07・SD13・SD14)などがある。

以下では、調査によって検出された遺構や遺物について、その検出状況や調査結果について、調査時の所見も交えて報告する。なお遺物については観察表での記載を中心とした。

第2節 縄文時代から古代の遺構と遺物

(1) 埋設土器

遺構(第5・6図、写真図版2) 埋設土器は1998年度調査区の東側から検出された。SX04の落ち込みに向かい緩やかに地山面が下る場所である。出土状況は、横にされた土器底部付近の破片に対して、東側に胴部の破片を立てるようにして埋まっていた。周辺には明瞭な掘り込みは確認できず、調査時に遺構確認面のベースとして認識していた地山質土の中に破片が埋まっていることに気づき、それを掘り上げて全体を検出したものである。共存する遺物は他にないので性格等については不明だが、土器片が立てられた出土状況からは意図的に埋設したものと推測でき、埋設土器として扱った。

遺物(第10図、写真図版8) 深鉢の底部である。外面は底部付近まで斜位の条痕文が付されており、内面は撫でて調整している。時期については判断の決め手となる属性が認められず不明点が多いが、概ね縄文時代晩期後半から弥生時代前期に所属するものと判断される。

時期 遺物から縄文時代晩期後半から弥生時代前期のものと思われる。

(2) 小穴群

遺構(第9図、写真図版2) 1998年度調査区の中央には、規模の小さな小穴が集中している地点が確認された。いずれも平面は略円形ないしは不定形を呈する。方形あるいは長方形に配されて建物の柱穴となる可能性もあるが、掘り込みが浅いものが多く形状が明瞭でないことや、柱痕跡がはっきり認められなかったことから、今回は、建物の柱穴との判断は行うことができなかった。

土層断面は暗褐色土の単層、もしくは、上層に暗褐色土、下層に地山質土が入る土層であり、土層からは自然河道跡SD05との共通性があると思われる。

遺物 出土していない。

時期 出土遺物が無いので不明であるが、覆土がSD05と共通することから縄文時代から弥生時代に位置づけられる可能性が高い。

(3) 周溝状遺構 (SX09)

遺構 (第8図、写真図版3) 1999年度調査区の北西で検出された。略隅九方形にめぐる周溝で南西部分が一部開くコの字状を呈する。周溝は幅約40cmから90cmで、深さは10cmから15cmと浅い。周溝内部には小穴が12基と土坑が1基存在する。細長い土坑状の遺構も存在するが倒木跡の可能性が高い。形態からは古墳時代の堅穴系建物跡に類似するが、柱穴が不明瞭であり、ここでは周溝状遺構とした。出土遺物は存在せず、時期についても不明である。

(4) 自然河道跡 (SD05)

遺構 (第7図、写真図版2) 1998年度調査区の南半で検出された。規模は幅約6mから9m、確認面からの深さ約20cmを測る。断面はなだらかな凹状で、覆土もレンズ状に堆積していることから、SD05は自然河道跡として認識した。流路は、調査区南端中央から北北東方向へ流れ、後に東方向へ曲がるようである。遺構内からは多数の小穴が検出されたが、有意なまとまりを見せるものは確認できていない。また一部は覆土上面から掘り込まれたものも認められることから、小穴のすべてがSD05に伴うものではないと思われる。

土層は上層が暗褐色土、下層が地山の黄褐色土との漸移層である褐色土である。概ねレンズ状に堆積していることから、自然堆積によるものと思われる。

遺物 (第11図、写真図版8) 遺物は遺構の南半から打製石斧が2点 (11)、北半には磨石1点 (6) と土器片が4点出土した。打製石斧は約1.5mの距離を置いて出土した2点が接合し、完形となるもので、2点とも遺構の底面近くで検出されている。磨石は磨面があまり明確ではなく、触感によってわずかに使用痕の存在が確認できる程度である。遺構のほぼ中央、層位的には下層から出土した。土器片は上層の暗褐色土から出土している。全て無文の土器片で細かいものがほとんどであるため図がはできなかった。胎土に粗めの砂粒を多く含む点で共通する。およそ1m程の範囲にまとまっていた。

時期 土器片は細片であり時期比定が困難であるが、概ね縄文時代後晩期から弥生時代のものと思われることから、遺構についても同様な時期のものと推定する。

(5) 自然河道跡 (SD11下層)

遺構 (第5・17図、写真図版6) SD11は1998年度調査区、1999年度調査区の2ヶ年にわたって調査されている。1998年度調査区では、調査期間等の制約から、トレンチを入れて土層断面や底面の状況、遺物の包含状況などを確認した。この際、覆土上層からは中世の遺物が出土するものの、覆土中層・下層からはごく僅かに数片の細かい土器片が出土するのみであったので、覆土上層までの掘り下げで調査を終了した。1999年度調査区では遺構の南側半分をほぼ完掘したが、やはり覆土中層・下層からの遺物出土がごくごく少ないことが確認された為、北側は覆土上層の中世遺物包含層までの掘り下げを行うにとどめた。本遺構については、中・下層について本節で報告し、上層については次節で報告する。

遺構は、調査区南側から北北東方向に流下する自然河道跡で、確認面での幅は約11mから15m、深さは最も深い部分で約2mである。前記したように、遺構覆土上層からは中世後半期の遺物が出土しており、遺構の埋没終了時期は中世後半期が考えられる。一方、覆土の下層から中層にかけては中世の遺物

は含まれず、縄文時代から古代にかけての遺物がごく少量出土したため、下層から中層にかけては古代以前の段階に機能していたものと推測される。レンズ状に堆積した覆土の状況からは、長い期間をかけて徐々に埋まっていったものと思われる。

遺物 (第10～12図、写真図版8) SD11から出土した遺物の内、古代までに属するものは縄文土器10点、打製石斧3点、土師器壺1点、須恵器壺1点、土錘2点である。図示した縄文土器1点(2)と打製石斧2点(12・17)は、1999年度調査区南半部の最下層から出土しており、本遺構の時間的な上限を示すものである可能性がある。1998年度調査区Cトレンチでは無文の縄文土器(もしくは弥生土器)の細片9点が下層から、古墳時代の土師器壺の口縁部破片(21)が中層(E断面9層内)から出土した。須恵器壺の口縁部破片(19)・土錘(18)は上層から中世の遺物とともに出土している。

時期 遺構最下層から出土した土器片(2)は縄文時代後期中葉に位置づけられるものである。Cトレンチ下層からは、細片のため時期不明な土器片が出土しているものの胎土や調整からは縄文時代晩期から弥生時代前期までに位置づけられるものであり、それ以降の新しい遺物が入る状況は確認されていない。従って少ない遺物から取えて推測するならば、SD11の最下層部分は縄文時代後期中葉から晩期にかけて堆積したものと理解することができよう。一方、古墳時代土師器(21)はE断面第9層出土であり、須恵器は覆土上層から中世の遺物とともに出土している。したがって遺構は縄文時代から中世段階まで機能していたものと思われる。

(6) 包含層出土遺物(第10～12図、写真図版8)

上記の他に包含層や中世以降の遺構から出土した古代までの遺物は以下の通り。

縄文(弥生)土器 1999年度調査区中央の地山内から縄文時代晩期後半から弥生時代のものと思われる土器片が5点出土している。いずれも細片であるため図示していない。他にはSX02から1点(4)、SD01から1点(3)の縄文土器が出土している。

剥片 SD02から1点(5)が出土している。

打製石斧 SD02から1点、SD04から1点、SD05から1点(11)、SD09から1点(13)、SD12から1点、SD13から15点(7・8・9・15・16)、SX03から1点(10)、SX04から1点(14)が出土した。

須恵器 SX04最下層から有台坏の底部(20)が1点出土している。

第3節 中世の遺構と遺物

(1) 畠状遺構 (SX03)

遺構(第13～15図、写真図版3) 1998年度調査区南東部分で検出されている。平面プランの南西角の部分で明瞭で、ほぼ直角に曲がる遺構の角が確認できる。南北ラインは、真北より東へ5度から10度、東西は約10度ほど軸をずらした状態で、東西のラインは隣接する溝状遺構(SD04)に平行する。北側は近世の溝状遺構(SD02)が重複しており、遺構の南北ラインもそこで途絶えるが、その北側の確認面でもごく僅かに遺構覆土が残っていた状況が認められたため、畠状遺構自体は北側にも伸びていたことが窺われる。東側については調査区際まで遺構が広がっていた。

遺構の深さは約10cmで、プランが確認できるところではやや急な角度で壁が立ち上がっている。覆土は褐色及び暗褐色土に地山質の黄褐色土ブロックが多く含まれる土である。底面は概ね平坦であるが、中央部では緩い凹凸がある部分が多い。また遺構の底面から小穴が数基検出されたが、覆土を観察する限り、SX03構築前のもと思われる。

遺構検出の際、遺構内の中央部には南北に伸びる小溝群が確認されている。これら小溝群は、SX03の遺構覆土内に掘り込まれたものであるため、小溝とSX03の覆土との識別が困難であった。また、小溝の深さも浅いものが多く、調査においては確認面での遺構上場の確認ができたのみで、掘り下げた際の遺構下場については確認できていない。

小溝群の長さは、長いもので約10mあるが、途中で切れているものが多い。幅は10cmから50cmで、深さは土層断面を見る限りでは約3cmから5cmであり、小溝の底がSX03の底面に達しているものはない(第14図SX03: B断面1層土)。

小溝群の配置を見ると約70cmから100cmの間隔をおいた組み合わせが4組(a・b・c・d)確認でき(第15図)、それぞれが重複する場所も存在する。重複関係をみると古い順にc1→d1→b1、c2→d2などとなっており、小溝群はc組→d組→b組の順序で作られたものといえよう。なお、a組については他と重複する部分がなく、順序については不明である。

周辺の遺構については、前述したようにSX04南端の東西ラインがSD04と約50cmの距離を置いて平行している。また、東では落ち込み(SX04)と重複しているが、第14図B断面を見ると、6層までSX04が埋まった後に、SX03の覆土(4層)が堆積している状況が観察されていることから、両者は時間的な前後関係にあり、SX03はSX04の上まで掘がっていたといえる。なお、さらに東側では、SX03の覆土は近世以降のものと思われる土層(13・14層)に切られており、東端の状況は確認できなかった。

遺物(第18図、写真図版9) 土師器皿(22・23・24・25)、瀬戸美濃鉄軸入子(26)、筒状土製品(27)が出土した。いずれも細かい破片が多く、円化に耐えるものが少ない。(27)は破片であり、器種が不明なため便宜的に筒状土製品とした。端部及び内・外面ともに丁寧にナデ調整されて仕上げられたものである。

時期 出土した土師器皿から、16世紀代に位置づけられよう。

(2) 落ち込み状遺構 (SX04)

遺構(第14・15図、写真図版4) 調査区東側は地山が一段下がっており、その部分を落ち込み状遺構(SX04)とした。遺構はほぼ南北方向に軸を向けており、明瞭な掘り込みが認められる南側部分と、なだらかに東に落ちていく北側部分に分かれる。落ち込みの南側部分と畠状遺構(SX03)との高低差は約30cmで、ほぼ垂直に落ちる段により区画されている。この落ち込み部分の幅は東西に約150cmで、

底面はほぼ平坦であるが、細かな凹凸がほぼ全向に見られた。

その東にはやや幅の広い溝状遺構が検出されている。SX04の平坦な底面を更に掘り込むようになっており、溝状遺構の底部との比高は約40cmである。確認面からの深さは約80cmで、SX04の西側ラインと同様に軸をほぼ南北に向けている。断面は緩いカーブを描く皿状で、最下層に小礫を含む砂層が堆積していたことから、機能時には流水があったものと判断できる。

また、調査区南東部を一部拡張したところ、この溝状遺構は東西方向に伸びる溝状遺構（SD04）にほぼ直行して接続することが判明した。南北方向に存在するこの溝状遺構に対して、SD04が西方から三叉的に接続しているのか、あるいは、単にSD04がほぼ直角に折れているのかについては、これ以上調査区を拡張できず不明なままであるが、この落ち込み状遺構の下に存在する溝状遺構がSD04から連続するものであることは確実である。以下では東西に伸びるSD04に接続する、この南北の溝状遺構をSD04bとしておく。

土層断面を見ると、SD04bの下層には、前記したように小礫混じりの砂層（第14図B断面12層）が堆積し、流路であったことがわかる。その直上には暗褐色土（10層）が堆積している。この層については地山質上のブロックなどは含まれず、自然堆積であるものと考えられよう。そして、次の段階で、SX04の底面を覆う8・9層が、SD04bの上を不整合に覆うことになる。この地山質土のブロックを多く含む8・9層は、上層の6層との間に水性堆積と思われる厚さ約1cmの7層を挟みつつ、落ち込み状遺構の南半全体を埋めている。

この8・9層については、ベースとなる暗褐色土に対して地山質土ブロックの包含される割合が3割以上あり、その地山質土ブロックが多量に含まれる状況は、一度掘り返された土が再び埋め戻されたものと推測させるものであった。

一方SX04の北側については、こうした埋め戻したような土層は確認されていない。北側では掘り込みも明瞭でないことから、人為的な掘削を受けた部分は南半部分だけであった可能性も指摘できよう。

遺物（第18図、写真図版9） 落ち込み部分については、SX04として単独の遺構として調査し、遺物も同一の遺構のものとして取り上げたが、調査の進展により上層にはSX03が重複しており、下層にはSD04bが重複していることが明らかになった。この内、下層のSD04b出土遺物については区別が可能であるものの、上層部分については調査後に遺物を区別することができなかった。よってSX04上層部分については、SX03の重複部分を含むものであることをおことわりしておく。

SX04からは、土師器皿（28・29・30・31・32・33・34）、白磁台付皿（35）、瀬戸美濃灰釉縁軸小皿（37）、瀬戸美濃灰釉丸皿（38）が出土している。土師器皿は細片が多く、破片数では90点近くあるが、実測できるものは数少ない。白磁高台付皿は同一個体と見られるもの2点があるが接合はしていない。図示した（35）には被熱の痕跡と思われる灰色にくすんだ部分がある。縁軸小皿（37）は外底部に墨書が認められるが、文字は判読できなかった。内面には朱塗が付着することから朱墨用の転用皿と思われる。

他に、SX04下層として取り上げたものに須恵器高台坏（20）、鉄釘（39・40）があるがこれらはSD04bに伴うものである。

時期 出土遺物には15世紀代のものと16世紀代のものが混在する。上層に16世紀代としたSX03が重複するので、そのために16世紀の遺物が混入している可能性があるが、SX04の掘り込みが15世紀であることを示す遺物の出土状況は確認されていない。よってここでは、15世紀から16世紀としておきたい。

(3) 溝状遺構 (SD04)

遺構 (第16図、写真図版5) 1998年度調査区南側で検出された。N-100°-Eの方向を向き東西に伸びている。遺構の幅は約1mから1.5mで、深さは約60cmから80cmである。覆土は最下層の砂層とその直上からの暗褐色土を主体とした土層とで大きく異なる。上層の暗褐色土を主体とする土層には地山質土の黄褐色土ブロックが多く含まれており、そのほとんどは埋め戻しによるものと推測される。砂層には大小の礫や断面が摩滅した土器片などが含まれることから、SD04が水路として機能していたことが指摘できよう。そして、東端と西端では西端の方が底面の標高が若干高いことから、西側から東側に向かって水が流下したものであろう。

SD04の西端は、近世の自然河道と思われるSD01と重複しており、削平されている。ただ、SD01の西隣にはSD04とほぼ同一時期の自然流路であったと思われるSD11が存在することから、SD04に流れ込む水はSD11からのものであった可能性が高い。一方SD04の東端は、前述したようにSX04の下に重複している溝状遺構SD04bに対してはほぼ直角に接続、ないしは、屈曲してつながっている。したがってSD04はSD11とSD04bを結ぶ水路であったものと考えられよう。そして、土層断面の状況から水路の廃絶に伴ない埋め戻しが行われたものと思われる。

遺物 (第18図、図版10) 土師器皿 (41・42・43・44・45・46・47)、珠洲甕 (48・49)、珠洲播鉢 (50・51・52・53)、青磁碗 (54)、碗 (55)、瀬戸美濃灰釉卍皿 (56)、瀬戸美濃灰釉鉢 (57) が出土している。いずれも破片で、珠洲以外は細かな破片が多い。土師器皿 (47)、珠洲甕 (49)、珠洲播鉢 (51・52) は遺構最下層の砂層から出土した。その他は上層出土である。

時期 15世紀代から16世紀代の遺物が出土している。最下層から出土した土師器皿 (47) は16世紀の特徴を有しており、16世紀のある時点までは水路として機能していた可能性があろう。ただし、17世紀代の遺物は認められないことから、16世紀代には埋め戻されていたものと思われる。

(4) 自然河道跡SD11上層 (SD08、SD09、SD10、SD12)

遺構 (第13・17図、写真図版6) 第2節 (5) で報告した遺構の上層部分である。SD11上層の第17図E断面1~3層、F断面6~9層が中世遺物包含層にあたる。遺物の検出を目的とした掘り下げを行ったが、出土した遺物は少量であった。

1998年度調査区においてはSD11右岸付近に3本の溝が検出されている (SD08、SD09、SD10)。東側がSD08、中央がSD09、西側がSD10であり、いずれも幅1m弱で深さの浅い溝状の遺構である。SD08は地山上の確認面で検出されたが、SD10はSD11の覆土内、SD09は一部がSD11の覆土に入った形で検出された。F断面では9層がSD09、10層がSD10に対応しており、SD11が埋没し終わる段階に形成されたものであることが土層断面での所見から見取され、それらは一連のものであるものと理解できる。SD12は1999年度調査区において、SD11の右岸近くの覆土内で確認されたものである。SD08・09・10のいずれかにつながるものであろう。

遺物 (第19~21図、写真図版10~14)

SD08からは、珠洲播鉢 (59)、珠洲甕 (61)、越前甕 (60)、青磁碗 (62) が出土している。

SD09からは、土師器皿 (63・64・65・66)、珠洲甕 (67)、珠洲甕 (68)、珠洲播鉢 (69~72)、加賀甕 (73)、白磁白付皿 (74)、白磁碗 (75)、青磁碗 (76)、瀬戸美濃天目茶碗 (77・78)、瀬戸美濃灰釉卍皿 (79・80)、瀬戸美濃灰釉平碗 (81)、瀬戸美濃灰釉皿 (82)、瀬戸美濃灰釉鉢 (83)、瀬戸美濃灰釉花瓶 (84)、瀬戸美濃灰釉筒形容器 (85)、瀬戸美濃灰釉広口四耳壺 (86)、石製品 (87・88)、鉄滓 (89・90)、銭貨 (91) が出土した。

広口四耳壺の底部片(86)内面には錆びた鉄片が付着しており(実測図ドット部分)、お歯黒壺としての機能が推測される。石製品(87)は長方形の縁を持つと思われる碗状の石製品である。割られており、鋭利な割れ口を擦り切り用の刃部として使用したと思われる使用痕が認められる。石製品(88)は表裏両面に擦痕が認められるので砥石であろう。鉄滓は断面半月状になる碗形で、表面には炭化物の付着が認められる。銭貨(91)は「大観通宝」である。

SD10から遺物は出土していない。

SD11からは、土師器皿(92・93・94・95・96・97)、越前甕(98)、珠洲播鉢(99・100)、珠洲鉢(101)、珠洲甕(102・103)、青磁碗(104)、中国製天目茶碗(105)、瀬戸美濃灰釉縁軸小皿(106・107)、瀬戸美濃灰釉軸皿(108)、瀬戸美濃灰釉平碗(109)、瀬戸美濃天目茶碗(110)、瀬戸美濃灰釉皿(111)、瀬戸美濃灰釉深皿(112)、瀬戸美濃灰釉花瓶(113)、漆塗製品(114)が出土している。

漆塗製品(114)は板の表裏面に漆状の塗料を塗ったもの。出土状況が不明瞭であり、中世のものかどうか不明である。

SD12からは珠洲播鉢(115)、珠洲甕(116)、瀬戸美濃灰釉軸皿(117)、瀬戸美濃灰釉折縁深皿(118)が出土している。

時期 SD08から出土した越前甕は15世紀後半頃に編年されるものである。出土遺物は少ないものの、概ねこの甕が、遺構の年代を示すものとして捉えておきたい。

SD09はやや出土遺物が多く、珠洲や瀬戸美濃は14世紀後半から15世紀前半頃に比定されるものが多い。やや幅があるものの、SD09が機能していたのはその頃であろう。土層断面で上位に位置するSD08よりやや古く、層位的にも矛盾はしない。

SD10については出土遺物が確認されていない。土層断面ではSD09の下位に位置することから、14世紀前半以前と推測される。

SD11上層はSD10、SD09、SD08について、それぞれの上層の覆土を含んだものであろう。それぞれの溝状遺構の下部のみを検出して、独立した遺構として調査しているが、本来は一連のものである。土層断面からは、上記SD08、SD09、SD12の覆土を中世遺物包含層のSD11の上層として調査したものと理解でき、出土遺物は、時期的に14世紀から15世紀に及ぶようである。

(5) 包含層出土遺物(第22・23図、写真図版14・15)

包含層や近世以降の遺構から出土した遺物には以下のようなものがある。

SD01からは、土師器皿(119)、越前甕(120)、珠洲播鉢(122)、珠洲甕(123)、越前播鉢(124)、白磁台付皿(125)、白磁端反皿(126)、中国製天目茶碗(127)、染付碗(128)、染付皿(129)、瀬戸美濃灰釉皿(130)、瀬戸美濃灰釉軸皿(131)が出土した。

SD02からは、珠洲甕(133・134)、白磁鉢(135)、青磁碗(136・137・138)、青磁皿(139)、越前円盤状陶製品(140)が出土している。

SD06からは越前甕(141)、青磁碗(142・143)、SD07からは染付碗(144)が出土した。

SD13は遺物量が多く、土師器皿(145)、珠洲播鉢(146・147)、加賀甕(148)、越前播鉢(149)、白磁皿(150)、白磁台付皿(151)、白磁端反皿(152)、白磁有台坏(153)、白磁碗(154・155・157)、白磁八角杯(156)、青磁皿(158)、青磁碗(159・160・161・162)、染付皿(164・165)、瀬戸美濃鉄釉平底末広碗(166)、瀬戸美濃鉄釉天目茶碗(167・168・169)、瀬戸美濃灰釉折縁深皿(170)、柄付片口(171)、水滴(172)、越前有溝砥石状陶製品(173)などが出土した。他に近世あるいはその可能性があるものとして、土師器皿(132)、刀子状鉄製品(174)、不明銅製品(175)、銭貨「寛永通宝」2点がある。

SD14からは土師器皿(178)が出土している。

第4節 近世の遺構

(1) 自然河道跡 (SD01)

遺構 (第24・25図、写真図版7) SD01は1998年度調査区の東側を北北東方向へ流下していたと思われる自然河道の跡である。幅は約5mから6mで、深さは1mから1.3mである。覆土は最下層が礫の混じる砂層であり、その上層は灰色土を基調とする。現地での調査では時間的な制約から完掘する事はできず、遺構の立ち上がり付近の掘り下げと、致力所のトレンチをいれて遺構の断面を確認するにとどまっている。覆土の観察では地山質の黄褐色土が灰色土にブロック状に含まれる層や、あるいは厚く層状に堆積している状況が窺えることから、遺構は埋め戻しをされているものと思われる。

遺物は中世のものも出土しているが、流水によると思われる磨耗が顕著なものが多い。主体は近世から近代であり、肥前の磁器・陶器が見られる。時間的な制約から近世の遺物については報告書に掲載することはできなかった。

(2) 溝状遺構 (SD02・SD03・SD06・SD07・SD13・SD14) (第16・24・25図、写真図版7)

SD02は1998年度調査区南半で東西に伸びる溝状遺構である。幅約1.5m、深さ30cm程の浅い溝でN-80°-Wの方向を向く。SD02は調査区内の東側では南側に折れている。西側ではSD01に接する部分で北方向に約90度折れており、そのままSD06につながっている。覆土は暗灰色土の単層であった。

遺物は中世陶磁器の他に、18世紀から19世紀の肥前陶磁が出土している。

SD03は1998年度調査区南端で東西に伸びる溝状遺構である。幅約1m、深さ約25cm前後の浅い溝でN-80°-Wの方向を向く。東端は調査区外に伸びており、西端はSD01に接続する。覆土は褐灰色土の単層であった。

遺物は中世陶磁器の他に、肥前の磁器と陶磁が出土している。時期的には17世紀前半を主として18世紀代のものであるが、18世紀のものはごく僅かである。

SD06は、1998年度調査区北半のSD01右岸側に位置し、右岸とほぼ並行する形で北北東方向へ伸びる溝状遺構である。南端ではSD02と接続しており、東からの流れが、向きを北向きに変えている。確認面からの深さは約60cmを測る。幅は上場で約60cmあるが、途中から約40cm程になり断面もハコ状に掘り込まれている。

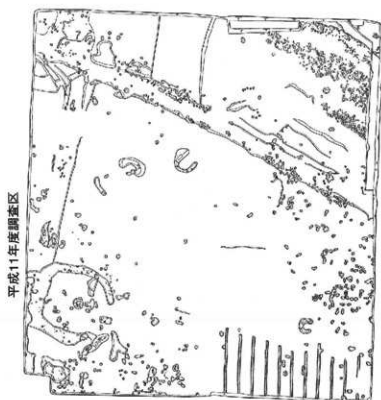
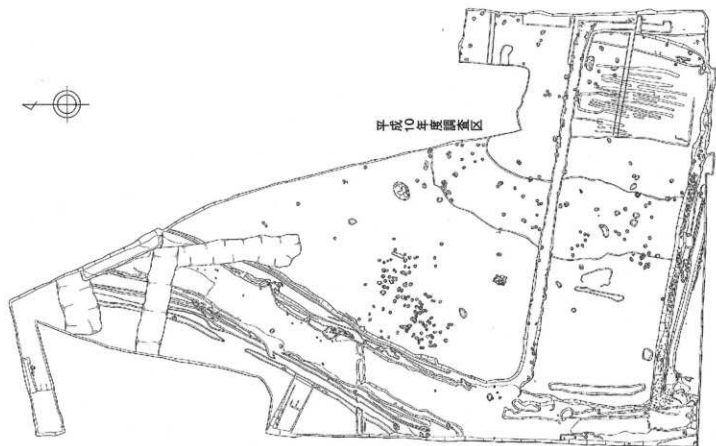
遺物は18世紀前半の陶磁器類が主体であるが数は少ない。新しいものでは19世紀に至るものも若干ある。

SD07は1998年度調査区北半のSD01内右岸側に位置し、右岸とほぼ並行する形で北北東方向へ伸びる溝状遺構である。SD01内河床で確認されたものであり、独立する遺構となるかは不明瞭である。

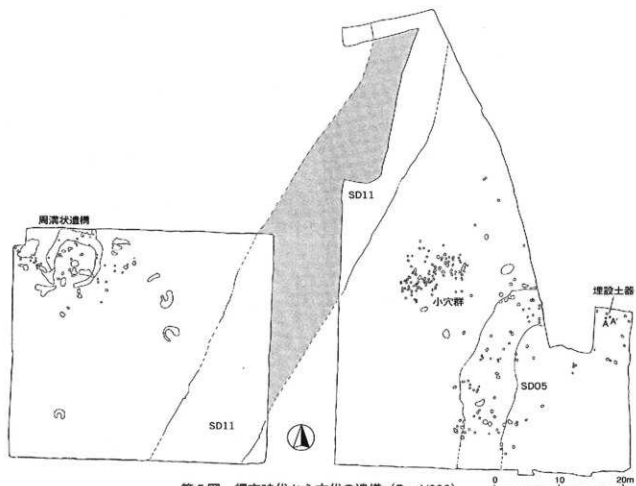
SD13は1999年度調査区で検出された。SD01内の左岸付近に位置し、左岸とほぼ並行して北北西方向に伸びている。幅は約3.5mで深さ約50cm、灰色土を基調とする覆土が認められた。

出土遺物は中世、近世ともに多くの遺物が認められた。新しいものでは17世紀から19世紀までの遺物が認められ、18世紀以後が主体となるようである。

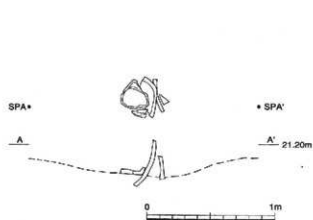
SD14は1999年度調査区北側で検出されている。N-100°-Eを向く幅の狭い溝状遺構で、ほとんどが削平されている。遺物は近世のものが若干出土した。



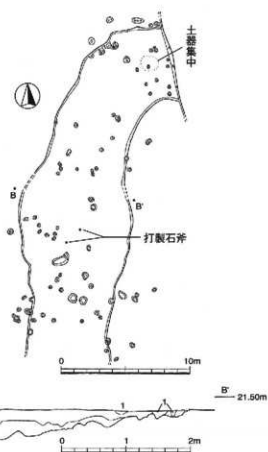
第4図 富樫館跡土居地区調査区全体図 (S=1/400)



第5図 縄文時代から古代の遺構 (S=1/600)



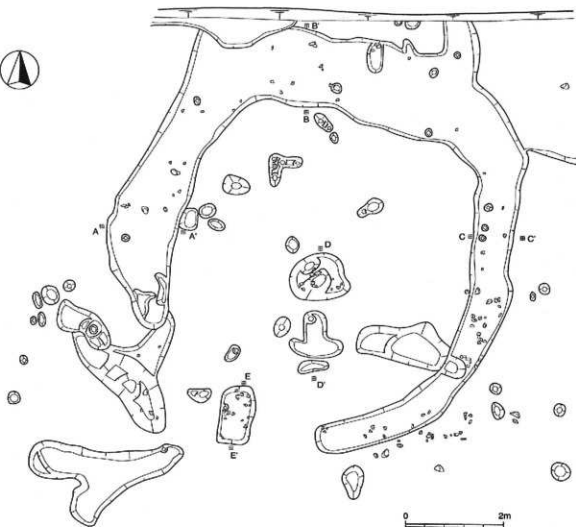
第6図 埋設土器 (S=1/30)



SD05 (B断面)
 1: 埋設
 2: 暗褐色土
 3: 褐色土



第7図 自然河道跡 平面図 (S=1/300)・土層断面図 (S=1/60)



A A' 21.70m D D' 21.70m

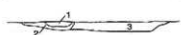


1. 黒褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土
3. 暗灰色粘質土



1. 黒褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土 (黄色ブロック混じる)

B B' 21.70m E E' 21.70m



1. 灰褐色粘質土
2. 暗灰色粘質土
3. 黒褐色粘質土

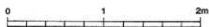


1. 黒褐色粘質土 (黄色ブロック混じる)
2. 黒褐色粘質土
3. 暗灰色粘質土 (黄色ブロック混じる)
4. 黄褐色粘質土
5. 暗灰色粘質土
6. 暗褐色粘質土

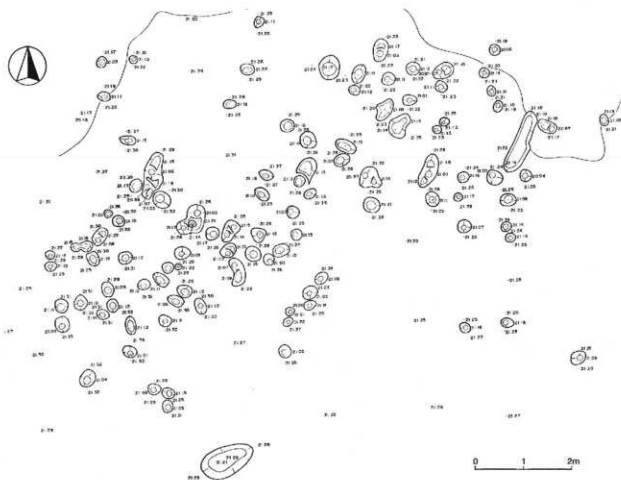
C C' 21.70m



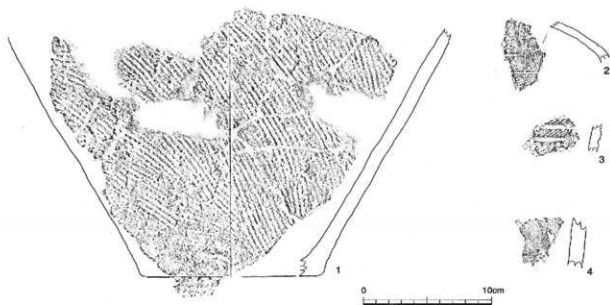
1. 黒褐色粘質土
2. 暗灰色粘質土



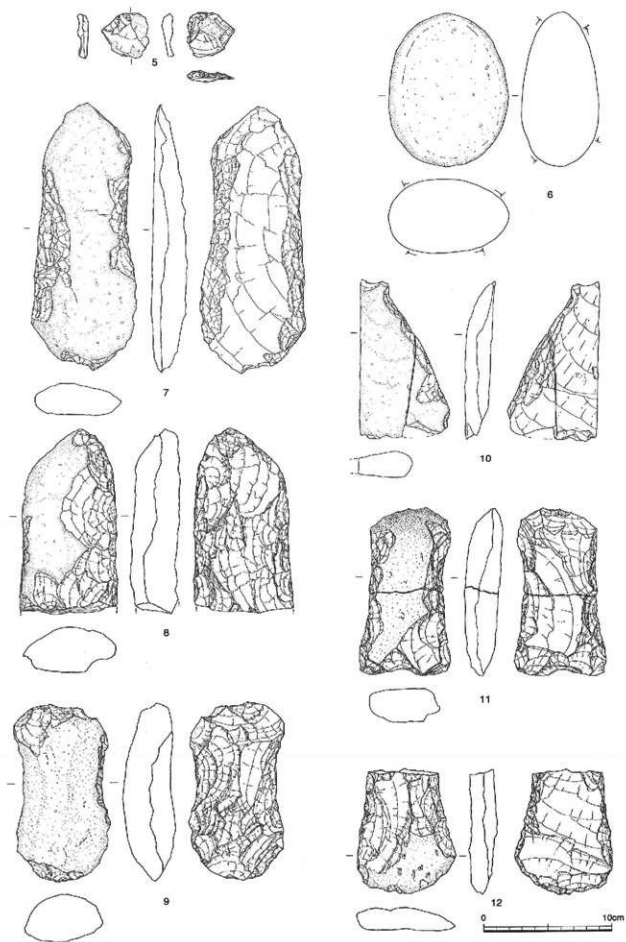
第8図 周溝状遺構 平面図 (S=1/80) ・断面図 (S=1/40)



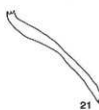
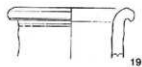
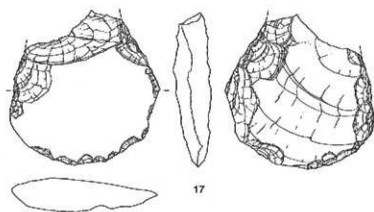
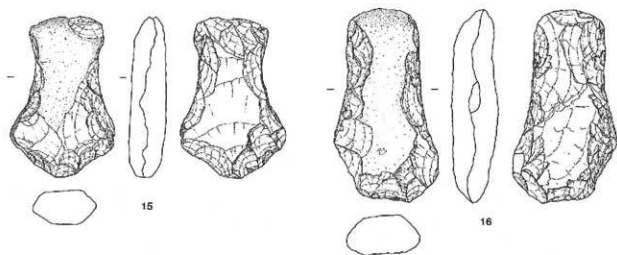
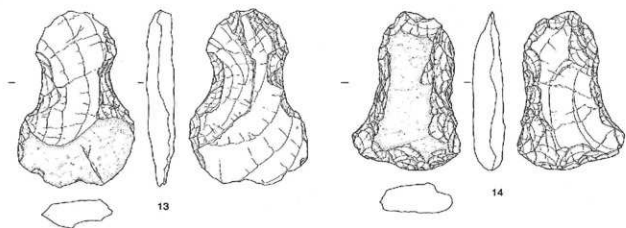
第9図 小穴群 (S=1/80)



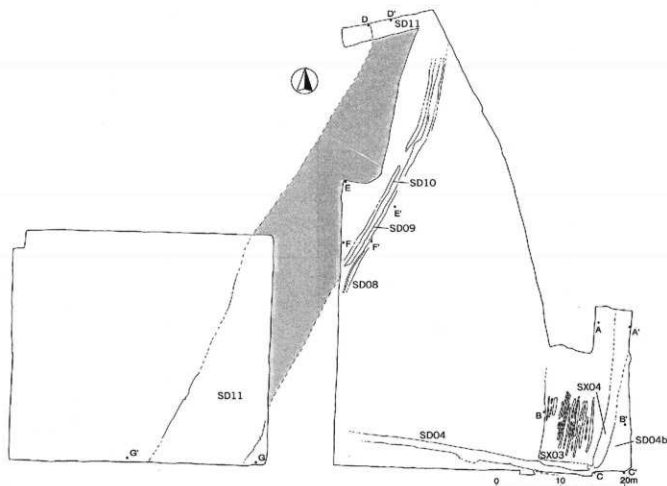
第10図 出土遺物 [縄文~古代1] (S=1/3)



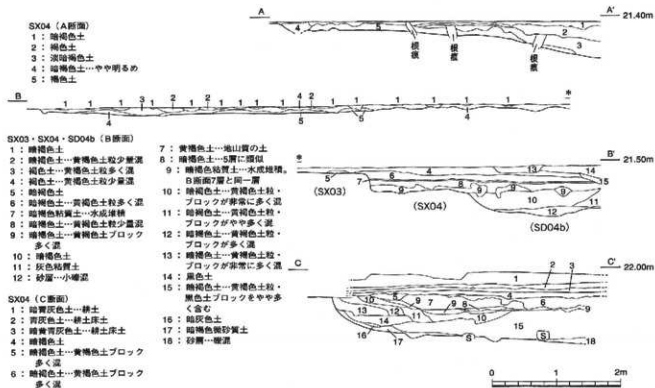
第11圖 出土遺物【縄文～古代2】(S=1/3)



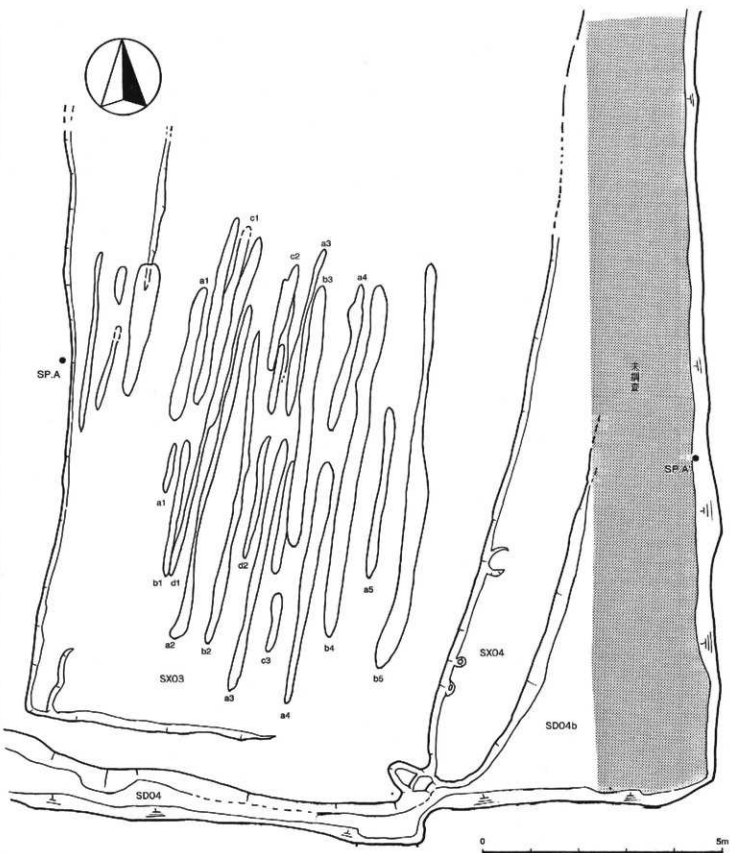
第12回 出土遺物 [縄文~古代3] (S=1/3)



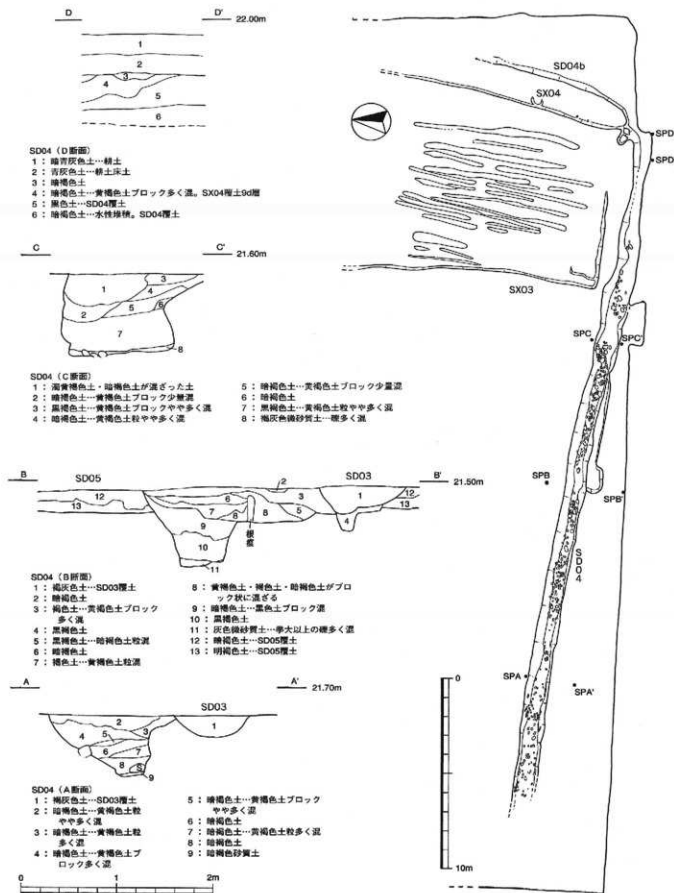
第13図 中世の遺構 (S=1/600)



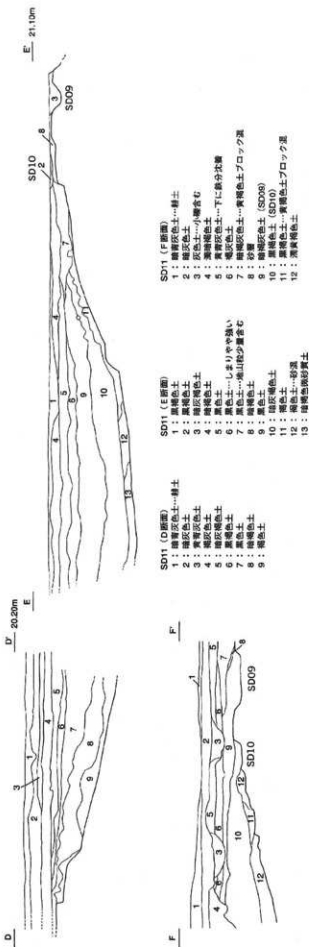
第14図 SX04、SX03 (SX04・SD04b)、SX04 (SD04b) 土層断面図 (S=1/60)



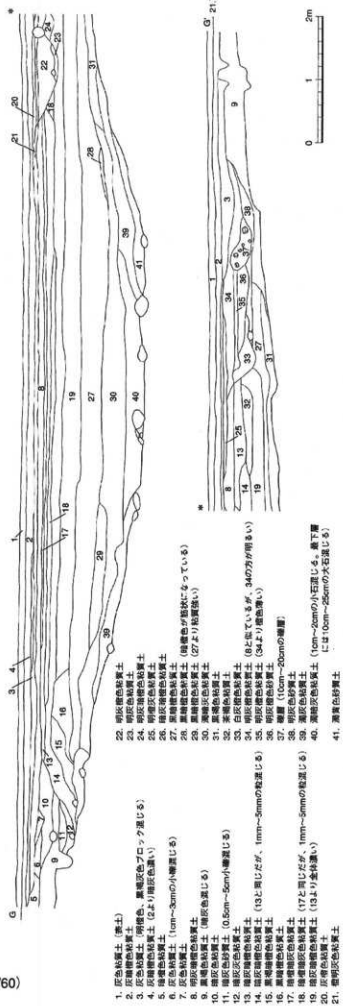
第15図 畠状遺構SX03、落ち込みSX04 平面図 (S=1/80)



第16図 溝状遺構SD04 平面図 (S=1/200)・土層断面図 (S=1/40)

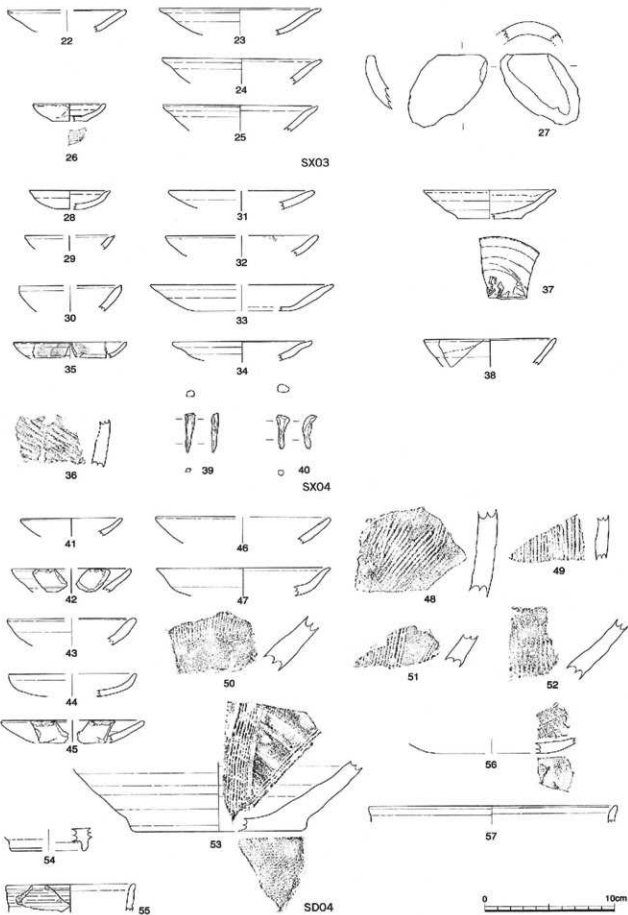


- SD11 (D断面)**
- 1: 暗褐色粘土…粘土
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 黄褐色土
 - 4: 暗褐色土
 - 5: 暗褐色土
 - 6: 暗褐色土
 - 7: 暗褐色土…山土体少量含む
 - 8: 暗褐色土
 - 9: 暗褐色土
- SD11 (E断面)**
- 1: 暗褐色土
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 黄褐色土
 - 4: 暗褐色土
 - 5: 暗褐色土
 - 6: 暗褐色土…下に鉄分沈着
 - 7: 暗褐色土…黄褐色土ブロック混
 - 8: 砂層
 - 9: 暗褐色土 (SD09)
 - 10: 黄褐色土 (SD10)
 - 11: 黄褐色土…黄褐色土ブロック混
 - 12: 黄褐色土
- SD11 (F断面)**
- 1: 暗褐色土…粘土
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 黄褐色土…小礫含む
 - 4: 黄褐色土
 - 5: 黄褐色土
 - 6: 暗褐色土…下に鉄分沈着
 - 7: 暗褐色土…黄褐色土ブロック混
 - 8: 砂層
 - 9: 暗褐色土 (SD09)
 - 10: 黄褐色土 (SD10)
 - 11: 黄褐色土…黄褐色土ブロック混
 - 12: 黄褐色土

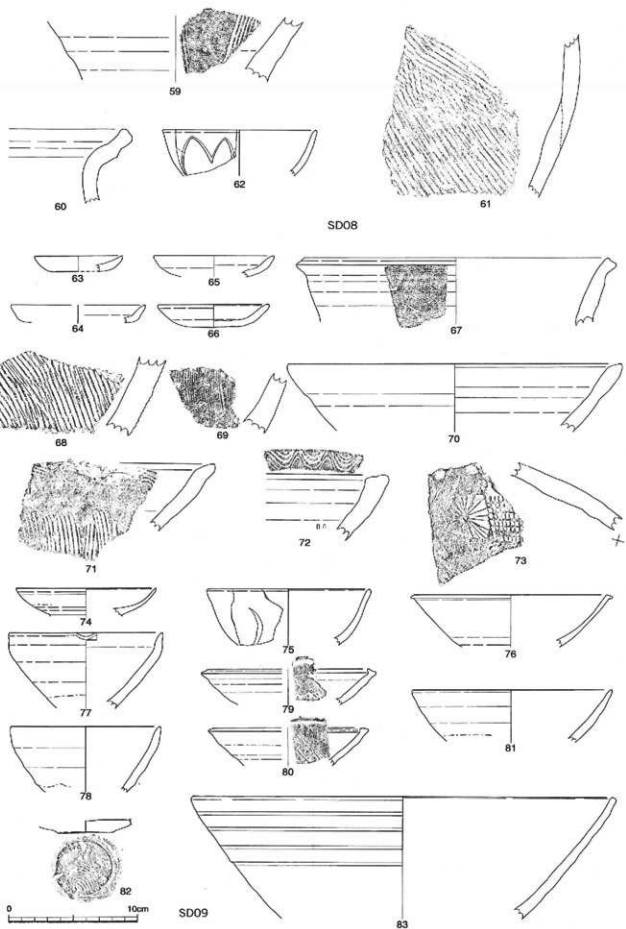


- SD11 (H断面)**
- 1: 灰褐色土 (薄土)
 - 2: 灰褐色土
 - 3: 灰褐色土、明褐色、黄褐色土ブロック混じる
 - 4: 灰褐色土 (2より暗褐色強い)
 - 5: 黄褐色土
 - 6: 灰褐色土 (1cm~3cmの小礫混じる)
 - 7: 灰褐色土
 - 8: 暗褐色土 (暗褐色が散在…土質が弱くなっていて)
 - 9: 暗褐色土 (27より暗褐色強い)
 - 10: 暗褐色土 (暗褐色強い)
 - 11: 暗褐色土 (0.5cm~5cm小礫混じる)
 - 12: 暗褐色土
 - 13: 暗褐色土
 - 14: 暗褐色土
 - 15: 暗褐色土 (13と同じだが、1mm~5mmの粒混じる)
 - 16: 暗褐色土
 - 17: 暗褐色土 (17と同じだが、1mm~5mmの粒混じる)
 - 18: 暗褐色土 (17と同じだが、1mm~5mmの粒混じる)
 - 19: 暗褐色土 (13より土体強い)
 - 20: 灰褐色土
 - 21: 暗褐色土
 - 22: 暗褐色土
 - 23: 暗褐色土
 - 24: 暗褐色土
 - 25: 暗褐色土
 - 26: 暗褐色土
 - 27: 暗褐色土
 - 28: 暗褐色土
 - 29: 暗褐色土
 - 30: 暗褐色土
 - 31: 暗褐色土
 - 32: 暗褐色土
 - 33: 暗褐色土 (8と似ているが、34の方が明るい)
 - 34: 暗褐色土 (34より暗褐色強い)
 - 35: 暗褐色土
 - 36: 暗褐色土
 - 37: 暗褐色土 (20cmの層)
 - 38: 暗褐色土
 - 39: 暗褐色土 (1cm~2cmの小石混じる、最下層には10cm~25cmの大石混じる)
 - 40: 暗褐色土
 - 41: 黄褐色土

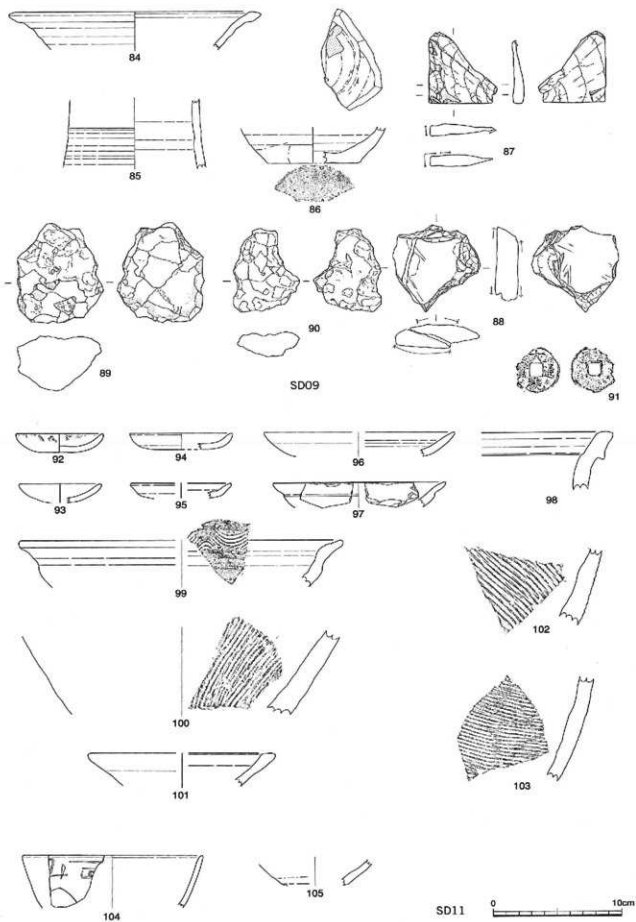
第17図 自然河道跡SD11断面図 (S=1/60)



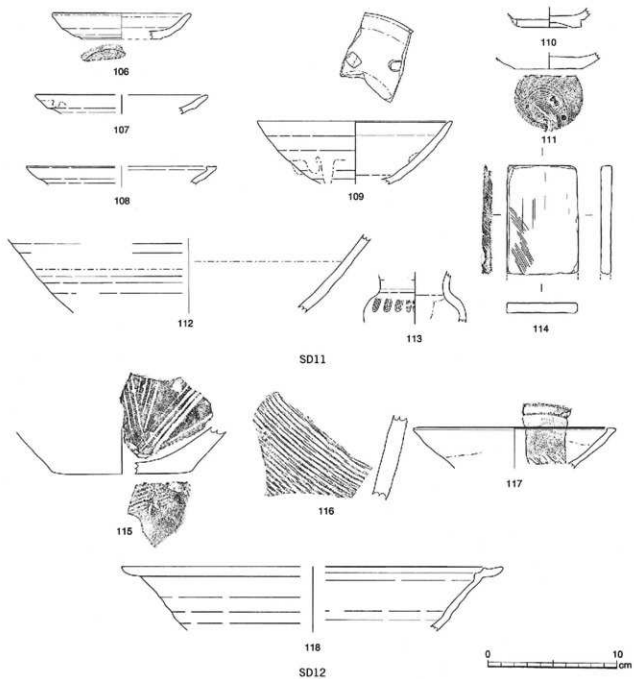
第18圖 遺構出土遺物1 (SX03 : 22~27, SX04 : 28~40, SD04 : 41~57) (S=1/3)



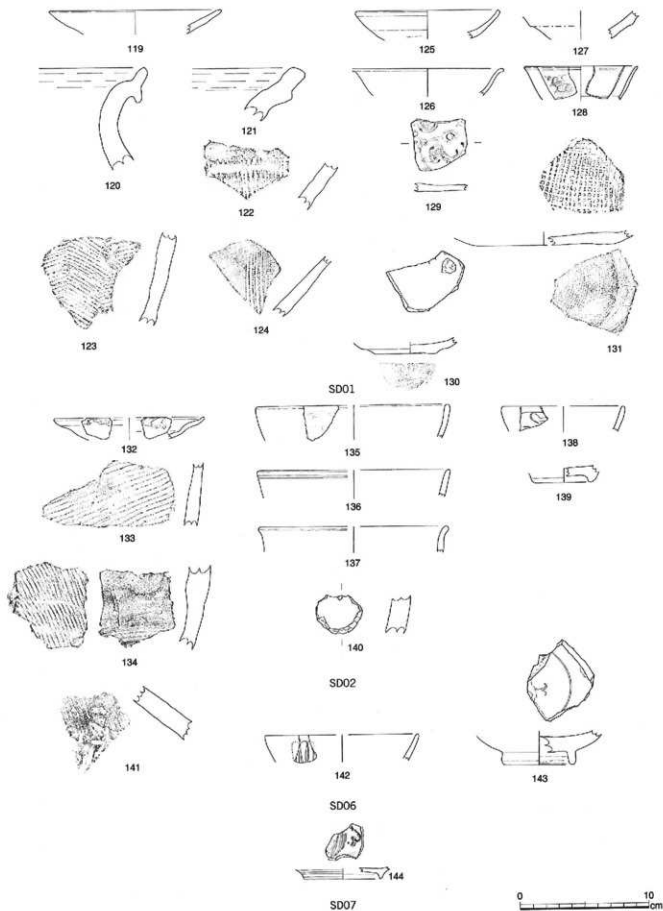
第19図 遺構出土遺物2 (SD08 : 59~61、SD09 : 63~83) (S=1/3)



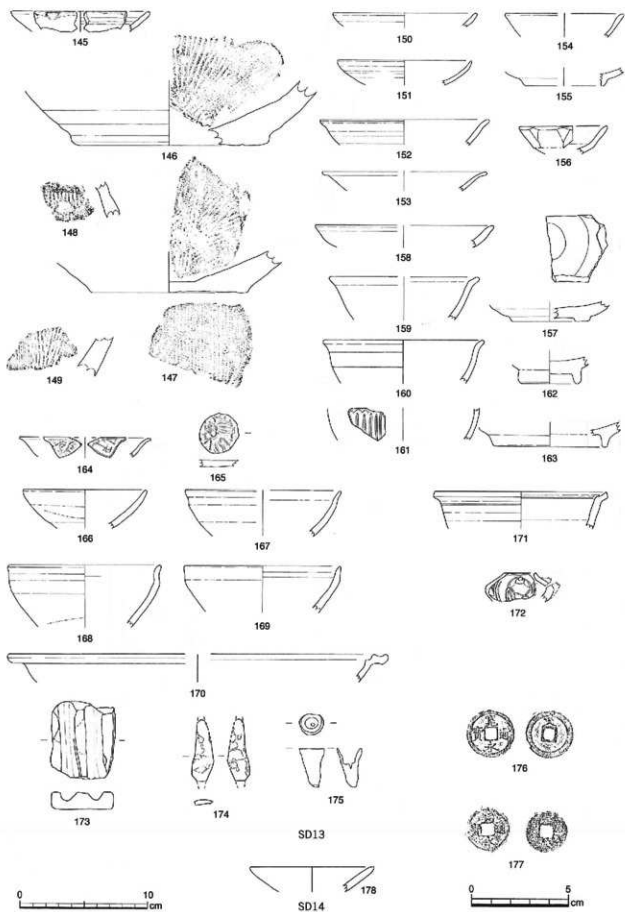
第20図 遺構出土遺物3 (SD09: 84~91、SD11: 92~105) (S=1/3)



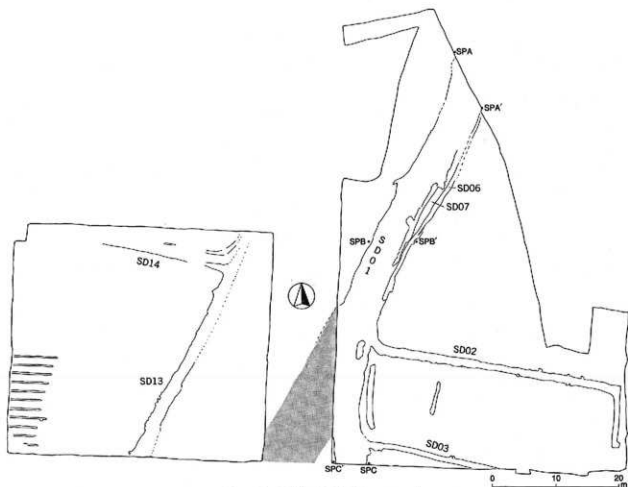
第21図 遺構出土遺物4 (SD11: 106~114, SD12: 115~118) (S=1/3)



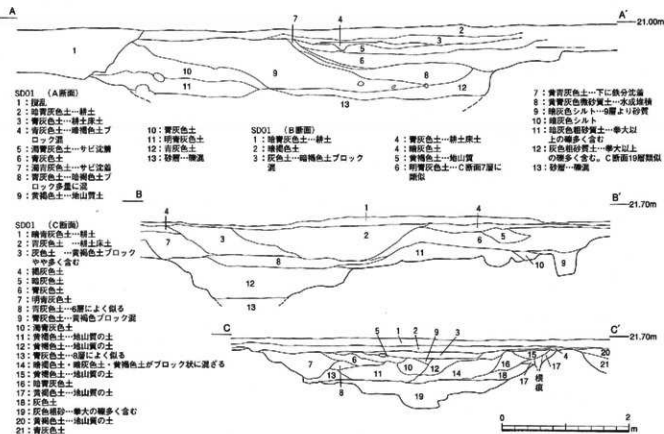
第22図 包含層出土遺物1 (SD01 : 119~131、SD02 : 132~140、SD06 : 141~143、SD07 : 144) (S=1/3)



第23図 包含層出土遺物4 (SD13: 145~177、SD14: 178) (S=1/3)



第24図 近世の遺構 (S=1/600)



第25図 SD01土層断面図 (S=1/60)

第5節 小結

(1) 縄文時代・弥生時代の遺構と遺物について

縄文時代に属する遺構としては、自然河道跡が2条（SD11、SD05）、埋設土器1基、小穴群がある。SD11下層から検出された土器片には、縄文時代後期中葉に比定されるものがあり、本遺跡では最も古い遺物となっている。SD05や埋設土器から検出されているのは、いずれも、条痕文や縄文、無文の土器片で、細かい時期を押さえられるものではないが、条痕文などの特徴から概ね晩期後半から弥生時代前期頃のものとして推定される。SD05にはそれぞれより新しい時代の遺物が含まれないので、概ねそうした時期に機能していたものと理解してよいであろう。他には小穴群があるが、この小穴群からは遺物が出上していない。覆土の状況がSD05に類似するため同様な時期のものとして推定するが、確証は得られていない。

出土遺物には土器片他に、打製石斧25点、剥片1点、磨石1点などがある。打製石斧の多出が本遺跡の特徴といえるが、出土地点を見ると縄文時代のもつと見られる遺構から出土したものは3点のみで、その他は新しい時代の遺構からの出土であった。このことは使用後に廃棄された打製石斧が、後世の耕地開発などで溝などに再度廃棄されたことを物語っている。こうした状況を素直に考えると、遺跡周辺での打製石斧を用いた活動の頻度がかなり多かったこと、そして、使用された打製石斧は遺構に埋められたりせずに周辺に投げ捨てられるものがほとんどであることが推測される。

打製石斧の形態を見ると、両側縁が平行する短冊形はない。側縁の傾きが著しい分銅形ものは1点（図12-13）あるのみで、両側縁が端部に向かって緩やかに開いていく撮形を早するものがほとんどである。石材は凝灰岩や柔らかめの安山岩などが多く特殊なものはない。遺跡周辺の旧河道などに認められる石材を使用したものと推測される。素材は大きめの礫を打ち欠いた縦長剥片や横長剥片で、背面に礫面を残すことが共通している。基部や端部は欠損しているものが多いので幅や厚みで比較すると、幅は65mmから95mmにおさまるものが19点、それ以上が1点、それ以下が4点、その他が1点であった。こうした特徴がどの程度の時間的、空間的な位置づけが得られるのかについては、今後の課題としていきたい。

(2) 古墳時代・古代の遺構と遺物について

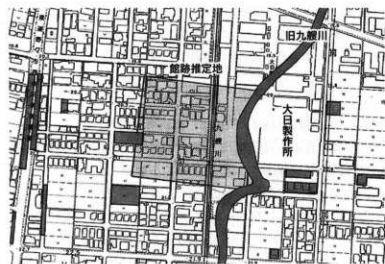
古墳時代・古代については、遺物・遺構共に最も少ない。遺物については土師器や須恵器、土製品が数片ずつあるのみで、まとまったものは見られない。遺構についても同様で、出土遺物から確実に該期のもつと理解できるのは自然河道跡SD11のみである。

周溝状遺構は出土遺物がなく性格が不明である。中世の墓とも思われたが覆土は黒褐色系の土であり中世包合層の土と異なっている。形態からは弥生時代から古墳時代に存在する周溝の付随する建物跡や周溝墓に類似していることから、それに類するものとの判断を行っている。

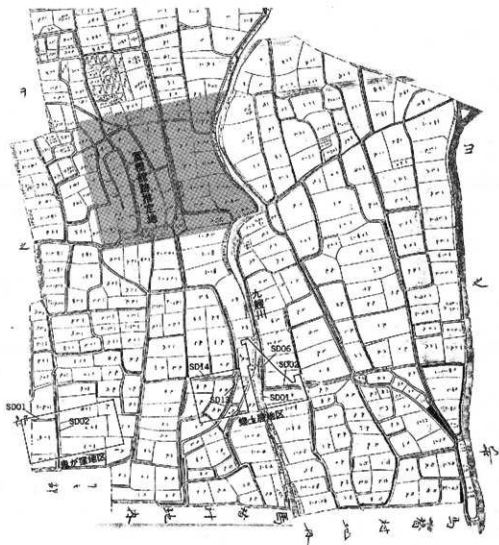
(3) 中世の遺構と遺物について

a: 富樫館跡との位置関係

郷土居地区は中世加賀守護の居館である富樫館跡の南方約450mの位置に存在する。富樫館跡については、伝聞や、江戸時代における土居の実測図（野々市町役場1990）によりその存在が指摘されている。近年の野々市町教育委員会の発掘調査では堀の一部が確認され、その実際の位置が推定されるに至った（第26図、田村2000）。



第26図 雷聲館跡推定地 (田村200)



第27図 調査区と旧地籍図 (明治22年製に加筆)

明治時代の地籍図（註1）を見ると、館跡の東側を北流する旧九艘川（現在は用水化）のやや上流部分に位置していることがわかる（第27図）。この旧九艘川には、調査区のSD01がほぼ重複しており、両者は同一のものであろう。これによりSD01は、地籍図作成の明治22年には自然河道として流れていたことが確実である。

b：遺構

遺構は自然河道跡SD11、溝状遺構SD04・SD04b、畝状遺構SX03、落ち込みSX04などが該期に属する。地籍図との対応では、調査区のSD11が、地籍図上で湾曲して南北に伸びる区画にはほぼ一致している。したがって、SD11は明治22年の段階では、埋まってしまっているものの耕地の区画としてはその範囲が遺存していたことがわかる。遺物の出土状況をもみても、SD11は中世後半までには埋没し、近世には自然河道や溝としては機能していなかったことが判明しているの、調査成果とも矛盾がない。しかし、その他の遺構については、明治22年の地籍図上に痕跡は窺えるものはない。

c：陶磁器

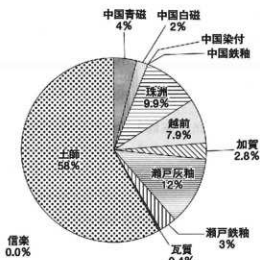
竪上居地区から出土した中世土器・陶磁器は破片数の総計で1233点であった（註2）。これは本遺跡では最もまとまった資料群であり、遺跡の主体を占めるのがこの時期であることを示すものである。一方、木製遺物については、遺跡が扇状地上に立地することもあり、ほとんど出土していない。したがって以下では陶磁器類を中心にその組成等を検討してみたい。

貿易陶磁から器種別に破片数を見ても、青磁は120点出土しており、全体の中での比率は10%である。器種は碗72点、皿9点、鉢4点、壺7点、その他28点である。碗の比率が60%を占めており、極端に高い。白磁は51点の出土で比率は4.1%である。碗4点、台付皿22点、端反皿16点、壺1点、その他8点であり、皿類で74%を占める。架付は21点の内、碗7点、皿13点、その他1点で白磁同様に皿の比率が高い。鉄釉天目茶碗は6点出土した。貿易陶磁全体では、碗と皿が器種的に卓越し、碗は青磁、皿類は白磁が多い状況が見取される。

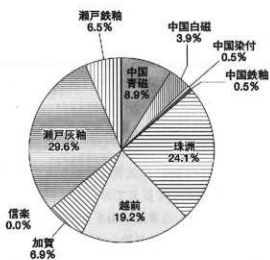
国産陶器では珠洲が139点で比率は11.3%である。壺41点、壺22点、播鉢37点、その他16点となる。越前は215点出土しており比率は18.2%を占めた。器種は壺147点、壺31点、播鉢9点、他28点であり、壺の多出と播鉢が少ないことが特徴である。加賀は49点で比率が4.1%、器種は、壺34点、壺9点、その他6点である。信楽は壺4点の出土であった。瀬戸美濃は全体の比率が21.4%で、土師器皿に次ぐ出土量である。灰釉皿40点、灰釉脚皿31点、灰釉碗20点、灰釉盤7点、灰釉花瓶3点、灰釉瓶11点、灰釉その他92点、鉄釉皿3点、鉄釉碗31点、鉄釉壺2点、鉄釉天目茶碗17点、鉄釉その他8点の合計265点が出土している。瀬戸美濃もどちらかといえば皿類が多いようである。土師器皿は全体で349点、比率は28.3%である。

出土遺構を見てみると、中世の遺構でややまとまった量の遺物が検出されているのは溝状遺構のSD09と自然河道跡SD11であり、その他の遺構からの出土はそれほど多くはない。また調査区東側のSX04からは遺跡全体量の約3分の1近くの土師器皿破片が出土しているが、他の陶磁器類はごく少ない。これら遺構は南北に伸びる遺構であり、あえて該期の人々が居住していた区域を推測するならば、その上流側である調査区外の南側が想定されるであろう。

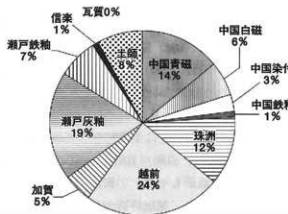
中世土器・陶磁器の出土量では、中世遺構からの貿易陶磁出土量が近世遺構からの出土量の約5分の1、国産陶器は約2分の1から3分の1の出土量となっており、近世以降の遺構から出土したものが多く傾向にある。中でも近世の溝状遺構であるSD13からの出土量は一際多く、その理由についても、溝の上流側である調査区南側における居住区域の存在を想定し、近世の耕地整理等で混入したものと理解すれば無理がないように思われる。



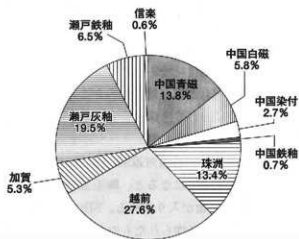
(1) 中世遺構出土中世土器・陶磁器組成



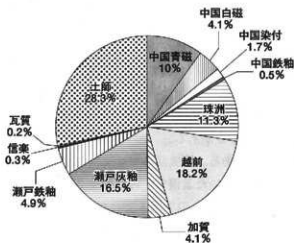
(2) 中世遺構出土中世陶磁器組成



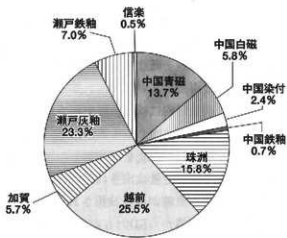
(3) 近世遺構出土中世土器・陶磁器組成



(4) 近世遺構出土中世陶磁器組成



(5) 中世土器・陶磁器全体組成



(6) 中世陶磁器類組成

第2表 甕土居地区出土中世遺物組成表

遺跡全体の土器・陶磁器の破片数を計測した組成表を第2表(グラフ5) 鯉十居地区中世上器・陶磁器組成グラフに示した。大きくまとめると、貿易陶磁が16.7%、瀬戸美濃21.4%、在地窯33.4%、土師器皿28.3%となり、北加賀地域の中世遺跡でよく見られるような土師器比率の突出は見られない。ただし、中世遺構出土の遺物でとると(グラフ1)、土師器の比率は58%を占めており、こちらは他の遺跡とよく似た状況を示しているといえる。

土師器を除いた組成を見てみると(グラフ6)、貿易陶磁が22.6%、在地窯47%、瀬戸美濃30.3%となり、貿易陶磁プラス瀬戸美濃と、在地窯とで概ね2分の1ずつとなる。この傾向は、中世遺構から出土した陶磁器の組成(グラフ2)や近世遺構から出土した陶磁器の組成(グラフ4)を見てもほぼ一定しており、遺跡自体の傾向として捉えておくことができよう。貿易陶磁と瀬戸美濃の比率は、中世遺構出土分では12.8%と36%だが、近世遺構出土分や遺跡全体での比率を比べると両者はほぼ等量ずつとなる。したがって両者のいずれかに数量的な優位性を認識するにはやや困難がともなうが、両者をあわせれば、遺跡全体としては瀬戸美濃や貿易陶磁の比率が高い傾向にあるといえよう。

d：時期

該期の上器や陶磁器の編年により(註3) 大まかな遺構の年代を把握し、遺跡における中世遺構の変遷をたどってみたい。

遺物の中には12世紀や13世紀代に比定されるものが若干あるものの、本遺跡出土遺物の主たる時期は、14世紀後半から16世紀である。遺構の重複状況からは、SD04bの上にSX04、SX04の上にSX03が重複しており、それぞれが前後関係にあることが明らかである。また、SD11については、自然河道が埋没する過程で上層において溝状遺構を形成しており、古い方からSD10、SD09、SD08に重複関係がみられた。それらについて、遺物の出土状況も踏まえ、時期の比定を行ったのが第3表である。

13世紀以前では、自然河道SD11以外に目立つ遺構は存在しない。14世紀に至ってもよく似た状況であるが、14世紀後半になると、陶磁器類が少量検出されるようになり、自然河道SD11上層のSD09や溝状遺構SD04に遺物が入り始める。SD04は直線的に東西に伸び遺構断面もややV字状に掘り込まれていることから人為的に作られたものと思われるが、出土遺物の存在により、掘削時期がこの頃に遡る可能性はある。

15世紀の遺物が出土しているのは、自然河道SD11上層のSD09、SD08の他に、溝状遺構SD04・SD04b、落ち込みSX04などであり、これら遺構群が該期に機能していたようである。SD04については、西側で北流する自然河道SD11と東側のSD04bを繋ぐように配置されているのに加え、前述したとおり、平面形や断面形等も人為的なものである可能性を高めており、計画的な用水として存在していたことが想定されよう。年表を確認すると、14世紀から15世紀は守護である富樫氏が周辺地域を治めていた時期に当たり、館跡周辺において、用水築造のような大規模な土木工事が行われていたとしても不自然ではない。また、調査区内には建物跡や屋敷地等は確認されていないが、遺物は一定量検出されており、周辺にこうした居住痕跡のある可能性は高い。仮に用水であればそうした居住区を区画するものであるかもしれず、今後周辺の調査を待ってその性格を判断していく必要がある。

16世紀の遺物が一定量検出されているのは、畠状遺構SX03である。事実記載でも述べているように、遺構覆土内に耕作痕跡が多数検出されており、畠として機能していた遺構であると判断される。SX03は土層断面の観察等からSD04bが埋められた後の段階で構築されたものであることが明らかとなっている。また、同じく土層断面の観察から、SD04bの埋没はSD04の埋没後になされており、SX03構築前に周辺の土地が一旦平滑に整えられたものと理解できよう。検出された遺構を見る限りでは、SX03はSD04bの上まで伸びており、埋め戻した土地も耕地として利用している状況が認められる。一方、

SD04とSX03は重複関係がなく、縁辺が約1mの間隔をおいて平行する状況となっている。この約1m幅の空間については、SD04埋没後にSX03が構築される際に意図的に作られたか、あるいは前時期においてSD04に土手状の高まりが伴っていたことも想定できることから、そうした土手状の高まりがそのまま残されたものとも考えられる。

SX04、SD04、SD04bなどは16世紀前半以降の遺物を含まないことから、それらについては16世紀前半までには埋め戻しが行われていたと見なされる。こうした事態については該期における地域支配の主体が一向一揆勢力に変わったことが関係しているのかもしれない。

(5) 近世以降

17世紀以降は、北流する自然河道路SD01と、東西に伸びる溝状遺構が主要な遺構となる。SD01は、中世の終わり頃まで機能していたSD11が、自然堆積によってほぼ埋まりきって河川としての機能を果たさなくなった段階か、あるいはその直前くらいから、SD11に代わるものとして機能を始めたようである。覆土からは中世から近世、近代までの遺物が出土しているが、土層を観察すると青灰色を基調とする土が多く、近世以降の遺構である可能性が高い。ただし、全域を掘りきっていないことから、機能し始めた時期については一部中世の終わり頃からとなる可能性も残る。本遺構は第27図の旧地籍図において、九艘川として描かれているものに相当し、大正時代に九艘川が直線化されるまでの間機能していたことが理解できる。

一方、溝状遺構SD02、SD06、SD13、SD14についても、旧地籍図において対応する位置に用水として描かれている（第27図）。地籍図の描かれた明治22年の段階において、周囲はほとんどが水田化されており、これら溝状遺構は、そうした水田に水を供給、排出する、用水や排水であったものと判断される。また、地籍図に対応する溝状遺構からの出土遺物を見ると概ね18世紀の中頃からのものが多いことから、この地籍図の状況が18世紀後半頃まで遡りうることが指摘できよう。

それでは、17世紀から18世紀前半の状況はどのようなものであったのであろうか。遺跡内には17世紀半の遺物が出土したSD03が存在する。SD03はSD02などとともに東西方向に伸びる溝状遺構であるが、この遺構は旧地籍図には該当するものがない。これにより18世紀のある段階において、用水が付け替えられることが推測されるが、遺構の構成自体はほとんどかわっておらず、付け替え以前も付け替え後とよく似た状況にあったことが推測される。近世以降は基本的に、遺跡周囲には田園風景が広がっていたものと推察されるのである。

明治時代にはいと、野々市町本町周辺での耕地整理が行われている。遺跡周辺においても耕地整理は行われ、同時に大正4年には鉄道の敷設とともに九艘川も直線化された。調査により旧九艘川（SD01）は埋め戻されたことが土層の堆積状況から判明しているが、埋め戻しはこの河道の直線化工事の段階で行われたものと思われる。こうして、現代へと続く方形に区画された水田風景が形成されたのである。

そして平成6年に至ると扇が丘住吉七地区画整理事業が着工された。高尾堀内線など都市計画道路とともに周辺の住環境が整備されており、平成16年度事業終了を予定している。本遺跡の発掘調査も区画整理事業に伴う記録保存のための発掘調査である。

以上、発掘調査の結果により、縄文時代から今に至る遺跡の変遷を述べてきた。中世後半を主体とする豊富な遺物や、九艘川の変遷など、遺跡北方に位置する富樫館跡を理解する上でも重要となる資料を得ることができたことは本遺跡発掘の貴重な成果といえよう。

この成果が、当地域の歴史理解の一助となることができれば幸いである。

以上簡単ではあるが気のついたことを述べたとめとした。筆者の理解不足のため、遺物や遺構の年代について齟齬を生じているかもしれない。おわびするとともに、今後の課題としたい。大方の御批判・御叱正を願うものである。

本報告をまとめるに当たり、下記の方々から多くのご教示を得ました。記して感謝申し上げます。

垣内光次郎、田村昌宏、藤田邦雄、増山 仁、吉田淳、布尾幸恵（敬称略）

註

註1 野々市町町史編纂室蔵

註2 中世陶磁器類全般の分類に当たり、(財)石川県埋蔵文化財センター 垣内光次郎氏のご教示を得た。

註3 中世陶磁器類の分類、時期比定については下記の文献を参照した。

藤沢良祐 1991 『瀬戸古窯址群Ⅱ』『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅹ』

藤田邦雄 1997 『第2章 第2節 中世加賀国の土師器様相』『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

宮下幸夫 1997 『第2章 第3節 在地窯「加賀窯」』『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

森田 勉 1978 『太宰府出土の輸入陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

参考文献

野々市町 1990 『野々市小史復刻版』

藤田邦雄 1990 『小松市高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

出越茂和 1992 『金沢市中原サワ遺跡』金沢市教育委員会

田村昌宏 2000 『富樫館跡復元考』『ののいち町史だより 創刊号』

永野勝彦 1999 『富樫館跡Ⅱ』野々市町教育委員会

吉田 淳 1998 『長池・二日市・御経塚遺跡群』野々市町教育委員会

吉田 淳 1998 『富樫館跡Ⅰ』野々市町教育委員会

吉田 淳 2000 『長池キタノハシ遺跡』野々市町教育委員会

年代	遺 構	出 来 事
13世紀 以前	SD11	
14世紀	SD10	・ 1335、富樫高家が加賀守護になる
15世紀	SX04 SD04b SD04 SD09 SD08	・ 1414、富樫満成が北加賀半国守護になる ・ 1418、富樫満成が加賀一國守護になる ・ 1447、富樫成春が北加賀半国守護になる ・ 1488、加賀守護富樫政親が、富樫泰高と本願寺門徒に攻められ、高尾城で自害する
16世紀	SX03	・ 1581、加賀の一向一揆が減ぶ ・ 1600、関ヶ原の戦い
17世紀	SD03 SD01	
18世紀	SD02-06 SD13-14	
19世紀	(明治22年)	・ 1868 (明治1年) ・ 野々市本町周辺の耕地整理行われる ・ 1912 (大正1年) ・ 1915、北鉄総線野町軌条線開通 九艘川の直線化
20世紀	(大正4年) 直線化 SD01 (九艘川)	・ 1926 (昭和1年) ・ 1995、扇ヶ丘住吉土地区画整理事業開始 ・ 1998、1999、壤土居地区発掘調査
21世紀		

第3表 遺構の変遷と歴史年表

第4表 富野館跡竪土居地区遺物観察表

番号	出土地点	種類	形態	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	残存率	色調1 (石部/灰)	色調2	胎土産地物	備考
1	SX04a	縄文土器	深鉢	-	*195	145	底部	灰褐色	長石・石英	築生土器か?縄文晩新後半~弥生前期	
2	SD11最下層	縄文土器	社口?	-	-	-	破片	赤灰色	砂礫・赤色粒	北瀬で区画し、縄文層文。後期中葉	
3	SD01	縄文土器	深鉢	-	-	-	破片	淡紫色	砂礫	北瀬。左瀬り0段多赤カ	
4	SX02	縄文弥生土器	深鉢	-	-	-	-	-	砂礫・長石	破片。糸振文施文。	
5	SD02a灰色	石器	剥片	36	37	9	完形	(注貫通灰岩)	高10g	高10g	
6	SD06 d上層	石器	磨石	121	94	61	完形	(安山岩)	重932g	薄い磨り面	
7	SD13	石器	打製石斧	213	83	27	完形	(四稜岩?)	重554g	重554g	
8	SD13	石器	打製石斧	*146	77	39	欠損	(磨灰岩)	重550g	刃部欠損	
9	SD13	石器	打製石斧	139	75	41	完形	(安山岩)	重487g	重487g	
10	SD13	石器	打製石斧	126	-	24	欠損	(磨灰岩)	重209g	修理により磨丸	
11	SD13	石器	打製石斧	133	71	23	完形	(安山岩)	重344g	重344g	
12	SD11最下層99	石器	打製石斧	*98	77	29	完形	(磨灰岩)	重209g	重209g	
13	SD09b	石器	打製石斧	140	92	21	完形	(磨灰岩)	重245g	重245g	
14	SD13	石器	打製石斧	125	85	25	完形	(磨灰岩)	重270g	重270g	
15	SD13	石器	打製石斧	126	83	29	完形	(磨灰岩?)	重355g	重355g	
16	SD13	石器	打製石斧	152	72	37	完形	(磨灰岩?)	重579g	重579g	
17	SD11最下層99	石器	打製石斧	*123	118	30	欠損	(磨灰岩)	重385g	重385g	
18	SD11検出時99	土製品	土壺	45	32	11	破片1/3	鈍い青色	赤色粒・長石・砂礫		
19	SD11-98	須恵器	甕	100	-	-	破片1/7	灰白色	砂礫		
20	SX04最下層	須恵器	有台杯	-	-	-	破片1/7	灰白色	長石・砂礫		
21	SD11-98	土師器	壺	-	-	-	破片	藍色	砂礫	SX04最下層底灰。藍か?	
22	SX03清	中世土師器	皿	92	-	-	口縁1/7	淡黄褐色	砂礫・長石・赤色粒	内外面磨耗著しい。古墳時代か。	
23	SX03清	中世土師器	皿	128	20	-	口縁1/8	鈍い黄褐色	砂礫	淡褐色付着。京都系。16世紀	
24	SX03b	中世土師器	皿	126	-	-	口縁1/9	鈍い黄褐色	砂礫	16世紀。京都系	
25	SX03	中世土師器	皿	122	-	-	口縁1/9	鈍い褐色	長石	16世紀。京都系	
26	SX03	瀬戸鉄器	小杯	57	14	28	全体1/4	外:灰紫色 内:暗赤褐色		16世紀。京都系	
27	SX03b	土師質土器	不明	-	-	-	-	淡赤褐色			
28	SX04c上層	中世土師器	皿	64	15	21	全体1/3	藍色	砂礫・長石	実重15・16同一個体	
29	SX04e上層	中世土師器	皿	70	-	-	口縁1/9	鈍い黄褐色	長石・赤色粒	15世紀代	
30	SX04e上層	中世土師器	皿	80	-	-	口縁1/12	鈍い褐色	砂礫	15世紀代	
31	SX04e上層	中世土師器	皿	116	-	-	1口縁1/18	内:淡青色 外:淡褐色	長石・赤色粒	油瀝・煤付着	
32	SX04e上層	中世土師器	皿	-	-	-	口縁1/9	淡黄褐色	砂礫・長石・赤色粒	16世紀代	
33	SX04e上層	中世土師器	皿	144	21	76	全体1/12	鈍い黄褐色	砂礫		
34	SX04e上層	中世土師器	皿	110	-	-	口縁1/6	淡黄褐色	砂礫黄褐色・赤色粒		
35	SX04d	白磁	皿	89	-	-	-	灰白色	砂礫	被蝕	
36	SX04d	磁器	皿	-	-	-	-	灰白色	砂礫	黒カ塗の破片	
37	SX04e上層	瀬戸灰釉	轉軸皿	104	23	51	全体1/5	藍・灰オリーブ 點:淡青色	砂礫	藍カ塗あり。朱繪付着。転用皿。底部同藍カ塗り。15世紀	

番号	位置 番号	出土地点	種類	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	発祥年 (西暦)	色調 (石器行村)	色相	胎上産和物	備考
38	18	SK04上層	瀬戸灰備	丸皿	104	-	-	11世紀/9 完形	緑：オリーブ黄 藍：灰白色	灰白色	長石	15世紀 長：32、幅：8、厚：5mm、重：1.65g 長：27、幅：9、厚：7mm、重：2.1g 14世紀 油燻付者。15世紀代小 16世紀
39	20	SK04下層	鉄製品	釘	-	-	-	完形			赤色粒 長石・赤色粒	
40	21	SK04下層	鉄製品	釘	-	-	-	11世紀/2 丸形	緑：透明 鈍い黄褐色	浅黄色	赤色粒 長石・赤色粒	
41	43	SD04e区	中国白磁	皿	80	-	-	破片 鈍い褐色			赤色粒 長石・赤色粒	
42	42	SD04b下層	中国土師器	皿	102	-	-	11世紀/9 鈍い褐色			赤色粒 長石・赤色粒	
43	39	SD04c区	中国土師器	皿	112	-	-	破片 淡黄褐色			赤色粒 長石・赤色粒	
44	38	SD04d区	中国土師器	皿	138	-	-	口縁1/18 鈍い黄褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
45	41	SD04	中国土師器	皿	112	-	-	11世紀/12 鈍い黄褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
46	40	SD04c区	中国土師器	皿	138	-	-	11世紀/9 鈍い黄褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
47	37	SD04d下層	中国土師器	皿	102	-	-	破片 青灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
48	50	SD04c区	珠洲	変	102	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
49	51	SD04d下層	珠洲	変	102	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
50	53	SD04d区	珠洲	変	102	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
51	49	SD04d下層	珠洲	変	102	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
52	52	SD04b下層	珠洲	変	102	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
53	48	SD04b区	珠洲	変	102	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
54	44	SD04d区	中国青磁	碗	100	-	-	底部破片 青灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
55	45	SD04	瀬戸灰備灰備	何皿	100	-	-	口縁破片 青灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
56	47	SD04c区	瀬戸灰備灰備	何皿	100	-	-	底部破片 青灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
57	46	SD04	瀬戸灰備灰備	何皿	100	-	-	口縁破片 青灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
59	59	SD08	珠洲	標鉢	192	-	-	破片 灰色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
60	58	SD08	越前	変	192	-	-	口縁破片 褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
61	60	SD08	珠洲	変	121	-	-	破片 鈍い黄褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
62	61	SD08	中国青磁	碗	121	-	-	口縁1/7 鈍い褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
63	72	SD09b区	中国青磁	碗	121	-	-	口縁1/7 鈍い褐色			長石・赤色粒 長石・赤色粒	
64	74	SD09b区	中国土師器	皿	69	12	40	口縁1/5 黄褐色			砂礫・赤色粒	
65	73	SD09b区	中国土師器	皿	106	-	-	口縁1/7 明黄褐色			長石・赤色粒 磁の塵・石系	
66	71	SD09b区	中国土師器	皿	88	18	36	全体1/3 黄褐色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
67	67	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
68	69	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
69	68	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
70	66	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
71	64	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
72	65	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
73	70	SD09b区	珠洲	変	88	18	36	口縁破片 灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
74	77	SD09b区	中国白磁	台付皿	148	-	-	破片 青灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
75	76	SD09b区	中国白磁	碗	148	-	-	口縁1/7 鈍い黄褐色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	
76	75	SD09b区	中国青磁	碗	148	-	-	破片 青灰色			砂礫・赤色粒 長石・赤色粒	

発掘番号	出土地点	種類	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	残存率	色澤 (石・磁石)	胎土原料物	備考
77	SD096区	瀬戸美濃灰釉	天目茶碗	120	-	口縁1/5	黒・黒色	胎：黄褐色	14世紀後半
78	SD096区	瀬戸美濃灰釉	天目茶碗	138	-	口縁1/8	胎：黒褐色	胎：灰白色	14世紀後半
79	SD096区	瀬戸美濃灰釉	御皿	138	-	口縁破片	胎：灰白色	胎：灰白色	15世紀
80	SD096区	瀬戸美濃灰釉	御皿	126	-	口縁破片	胎：灰白色	胎：灰白色	15世紀
81	SD096区	瀬戸美濃灰釉	平碗	157	-	口縁1/6	胎：灰白色	胎：灰白色	胎部阿形赤切り施。
82	SD096区	瀬戸美濃灰釉	御皿	328	-	底部	胎：灰白色	胎：灰白色	
83	SD096区	瀬戸美濃灰釉	鉢	328	-	口縁破片	胎：灰白色	胎：灰白色	
84	SD096区	瀬戸美濃灰釉	花瓶	198	-	口縁1/8	胎：灰白色	胎：灰白色	
85	SD096区	瀬戸美濃灰釉	筒形容器	-	-	胎部破片	胎：灰白色	胎：灰白色	
86	SD096区	瀬戸美濃灰釉	口圓形香	-	-	胎部破片	胎：灰白色	胎：灰白色	
87	SD096区	瀬戸美濃灰釉	口圓形香	57	9	底部1/3	胎：灰白色	胎：灰白色	胎部内面に胎が有る。胎黒黒色。胎部阿形赤切り施り切り刃部あり。重29g
88	SD096区	磁石	磁石?	69	69	破片	(粘板岩)	重51g。胎黒。	
88	SD096区	磁石	磁石	69	68	破片	(磁板岩)	重227g	
88	SD096北区	磁石	磁石	79	68	破片		重90g	
90	SD096北区	磁石	磁石	67	53	破片		径23・厚2mm、重1.5g	
91	SD096北区	磁石	磁石	67	53	破片		油煙付着	
92	SD11上層89	中世十師器	皿	70	15	全体1/4	淡赤褐色	長石・赤色粒・赤色粒・砂塵・長石・海粉骨針	
93	SD11上層89	中世十師器	皿	66	-	口縁1/3	黄色	長石・赤色粒・砂塵	
94	SD11-99	中世十師器	皿	80	13	全体1/5	淡赤褐色	長石・赤色粒・砂塵	
95	SD11-99	中世十師器	皿	-	-	口縁破片	鈍い黄褐色	赤色粒・砂塵	
96	SD11-99	中世十師器	皿	-	-	口縁破片	鈍い黄褐色	黒色粒・長石	
97	SD11上層88	中世十師器	皿	136	-	口縁1/12	鈍い黄褐色	長石・砂塵・油煙付着	
98	SD11上層89	越前	甕	-	-	口縁破片	赤灰色	砂塵・長石	
99	SD11上層89	越前	拵鉢	-	-	破片	灰色	砂塵	
100	SD11-99	越前	拵鉢	-	-	破片	灰	長石・砂塵・海粉骨針	
101	SD11-99	越前	鉢	-	-	口縁破片	灰色	砂塵・長石	
102	SD11上層89	越前	甕	-	-	破片	灰白色	砂塵	
103	SD11上層89	越前	甕	-	-	破片	灰白色	砂塵	
104	SD11	中国産	碗	-	-	破片	灰色	砂塵	
105	SD11-99	中国産	碗	-	-	破片	灰色	砂塵	
106	SD11上層89	瀬戸美濃灰釉	天目茶碗	110	21	破片	胎：灰白色	胎：灰白色	胎部阿形赤切り施。
107	SD11上層89	瀬戸美濃灰釉	鉢	64	-	破片	胎：灰白色	胎：灰白色	
108	SD11-99	瀬戸美濃灰釉	鉢	-	-	破片	胎：灰白色	胎：灰白色	
108	SD11-99	瀬戸美濃灰釉	御皿	-	-	破片	胎：灰白色	胎：灰白色	
109	SD11-99	瀬戸美濃灰釉	平碗	154	-	全体1/2	胎：灰白色	胎：灰白色	
110	SD11上層89	瀬戸美濃灰釉	天目茶碗	-	51	底部	胎：灰白色	胎：灰白色	胎部阿形赤切り施。
111	SD11-99	瀬戸美濃灰釉	天目茶碗	-	54	底部	胎：灰白色	胎：灰白色	

番号	実測番号	出土地点	種別	形態	口径(mm)	高さ(mm)	底径(mm)	残存率	色割(石器石料)	色属2	動土説和物	備考
111	SD11上層99	瀬戸内海式灰橋	灰皿	花皿	-	-	-	-	破片	灰白色		材質不明。表裏面滑り。内面に彫刻あり。
112	105	SD11上層99	瀬戸内海式灰橋	花皿	-	-	-	-	破片	灰白色		内面彫刻。底部ハケ状灰床による全でつけ
114	106	北区東端	漆塗製品	瓶	-	-	-	-	底面破片	灰黄色	漆・砂漚	
115	116	SD12-99	珠洲	樽鉢	-	-	110	-	破片	灰褐色	長石・漆漚者針	
116	117	SD12-99	珠洲	甕	-	-	-	-	破片	灰褐色		
117	115	SD12-99	瀬戸内海式灰橋	脚皿	160	-	-	-	口縁破片	灰白色		
118	114	SD12-99	瀬戸内海式灰橋	折縁深皿	-	-	-	-	口縁破片	灰白色		
119	122	SD001a	中世十部器	甕	135	-	-	-	口縁1/7	鈍い黄褐色	長石	16世紀前半~中頃
120	132	SD01a	越前	甕	-	-	-	-	口縁破片	灰白色		
121	124	SD01e	珠洲	甕	-	-	-	-	口縁破片	灰白色	長石	割目7水/23mm
122	131	SD01	珠洲	樽鉢	-	-	-	-	破片	灰白色	長石	割目6水/18mm
123	130	SD01e	珠洲	甕	-	-	-	-	破片	灰白色	長石	16世紀前半
124	133	SD01	越前?	樽鉢	-	-	-	-	口縁1/12	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
125	119	SD01	中国白磁	合付皿	116	-	-	-	口縁破片	鈍い赤褐色	黒色紋	
126	120	SD001e	中国白磁	燗反皿	-	-	-	-	口縁破片	鈍い赤褐色		
127	189	SD01	中国陶器磁鉄	天目茶碗	-	-	-	-	口縁破片	鈍い赤褐色		
128	193	SD001c	中国灰付	甕	-	-	-	-	破片	透明		
129	121	SD01	中国灰付	甕	-	-	-	-	破片	透明		
130	128	SD01	瀬戸内海式灰橋	皿	-	-	48	-	底部破片	透明		底部回転糸切り痕。内面に粘土土
131	126	SD01	瀬戸内海式灰橋	脚皿	-	-	100	-	破片	透明		底部回転糸切り痕
132	35	SD02a	中世十部器	皿	-	-	-	-	破片	鈍い褐色	砂漚	漆漚付者
133	33	SD02	珠洲	甕	-	-	-	-	破片	灰白色	砂漚	
134	32	SD02c	珠洲	甕	-	-	-	-	破片	灰白色		
135	26	SD02b	中国白磁	鉢	146	-	-	-	口縁1/8	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
136	27	SD02d	中国白磁	碗	152	-	-	-	口縁1/18	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
137	28	SD02d	中国白磁	碗	150	-	-	-	口縁1/18	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
138	92	SD02a	中国青磁	碗	-	-	-	-	口縁破片	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
139	25	SD02b	中国青磁	碗花里	-	-	43	-	底1/3	鈍い赤褐色	砂漚	高台内輪輪状に盛り取る。16世紀中葉~後半
140	34	SD02c	越前	何種か	-	-	-	-	底1/3	淡青灰色		内面彫刻製品
141	194	SD06	越前?	甕	-	-	-	-	破片	青灰色		高台内輪輪状に盛り取る。16世紀中葉~後半
142	91	SD06	中国青磁	碗	-	-	-	-	口縁破片	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
143	24	SD06	中国青磁	碗	-	-	54	-	底1/3	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
144	30	SD07	中国灰付	甕	60	-	-	-	底部1/6	鈍い赤褐色	黒色燻紋	
145	143	SD13	七海器	樽鉢	110	-	-	-	口縁1/9	淡黄褐色	長石	漆漚付者。内面に沈澱。五世
146	156	SD13	珠洲	樽鉢	-	-	140	-	底部1/3	灰白色	長石	内面すりへり著しい
147	157	SD13	珠洲	樽鉢	-	-	106	-	底部破片	明オリープ灰	長石・石英・漆漚者針	
148	159	SD13	加賀	甕	-	-	-	-	破片	灰白色		指印：第二段蓮子指子

番号	光源 番号	出土地点	種類	器種	口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	残存率	色調1 (右側5材)	色調2	胎土混和物	備考
149	158	SD13	越前?	拍鉢	-	-	-	破片	灰赤色斑	胎: 灰色	灰石	15世紀
150	135	SD13	中国白磁	皿	114	-	-	1口縁1/5	胎: 灰白色	胎: 灰白色	黒色微粒	15世紀
151	137	SD13	中国白磁	合付皿	106	-	-	1口縁1/9	胎: 透明	胎: 灰白色	黒色微粒	16世紀
152	134	SD13	中国白磁	滑反皿	-	-	-	口縁破片	胎: 透明	胎: 灰白色	黒色微粒	16世紀
153	138	SD13	中国白磁	有台杯	-	-	-	口縁破片	胎: 透明	胎: 灰白色	黒色微粒	16世紀
154	140	SD13	中国白磁	碗	-	-	-	口縁破片	胎: 透明	胎: 灰白色	黒色微粒	16世紀
155	139	SD13	中国白磁	碗	-	-	-	底部破片	胎: 透明	胎: 灰白色	黒色微粒	16世紀
156	192	SD13	中国白磁	八角杯	-	-	-	口縁破片	胎: 灰白色	胎: 灰白色	黒色微粒	15世紀
157	200	SD13	中国白磁	碗	140	-	61	底部破片	胎: 灰白色	胎: 橙色		見込み輪状のナズリ取り。
158	191	SD13	中国青磁	皿	-	-	-	1口縁破片	胎: オリーブ灰胎	胎: 灰白色		
159	150	SD13	中国青磁	碗	-	-	-	口縁破片	胎: オリーブ灰胎	胎: 灰白色		
160	199	SD13	中国青磁	碗	127	-	-	口縁破片	胎: オリーブ灰胎	胎: 灰白色		
161	151	SD13	中国青磁	碗	-	-	-	口縁破片	胎: オリーブ灰胎	胎: 灰白色		
162	149	SD13	中国青磁	碗	-	-	44	底部1/3	胎: オリーブ灰胎	胎: 灰白色		
163	152	SD13	中国青磁	鉢	-	-	86	底部1/7	胎: 緑灰色	胎: 灰白色		
164	141	SD13	中国染付	皿	-	-	-	口縁破片	胎: 透明	胎: 灰白色		
165	142	SD13	中国染付	皿	-	-	-	口縁破片	胎: 透明	胎: 灰白色		
166	145	SD13	瀬戸美濃鉄釉	平茶碗	98	-	-	口縁1/6	胎: 黒色	胎: 灰白色		
167	146	SD13	瀬戸美濃鉄釉	天目茶碗	100	-	-	口縁破片	胎: 黒色	胎: 灰白色		
168	147	SD13	瀬戸美濃鉄釉	天目茶碗	122	-	-	1口縁1/7	胎: 黒色	胎: 灰白色		
169	148	SD13	瀬戸美濃鉄釉	天目茶碗	122	-	-	1口縁1/12	胎: 黒色	胎: 灰白色		
170	154	SD13	瀬戸美濃鉄釉	折付片口	134	-	-	口縁破片	胎: オリーブ黄胎	胎: 灰白色		
171	190	SD13?	瀬戸美濃鉄釉	折付片口	-	-	-	口縁破片	胎: オリーブ黄胎	胎: 灰白色		
172	155	SD13	瀬戸美濃鉄釉	水盥	25	-	-	口縁破片	胎: 灰白色	胎: 灰白色		
173	171	SD13	越前	石清磁石	62	50	13	破片1/5	胎: オリーブ黄胎	胎: 灰白色		
174	197	SD13	鉄製品	刀子?	49	18	7	破片	胎: 灰白色	胎: 灰白色		
175	198	SD13	銅製品	?	31	19	-	-	-	-		
176	195	SD13	銅製品	鍔袋	-	-	-	-	-	-		
177	196	SD13	銅製品	鍔袋	-	-	-	-	-	-		
178	196	SD13	銅製品	鍔袋	-	-	-	-	-	-		
179	118	SD14-99	中世土師器	皿	98	-	-	口縁1/9	胎: 橙色		赤色粒	磨耗著しい

第4章 富樫館跡鬼ヶ窪地区

第1節 遺跡の概要

本遺跡は前章の富樫館跡瓊上居地区より、約150m西に位置する。

基本上層は、表土は現耕土で15cm～20cmを測り、その下には耕土の整地層となる床土が僅かに確認することができる。その下層には、10cm～20cmの遺物包含層にあたる暗褐色粘質土がある。今回の調査では、土器包含層には遺物はほとんど含まれていなかった。その下の地山は黄褐色砂礫土でその大部分が石礫層であった。

調査は2,300㎡を対象としている。富樫氏関連遺跡は民間開発による小面積調査がほとんどでこの様な区画整理による広範囲な調査は遺跡周辺では珍しく、遺構は縄文時代の土坑1基、中世では東西、南北方向に走る溝と竪穴遺構、集石土坑が確認された。南北溝より西側に遺構が集中し、遺物は縄文時代、中世のものが主体で、中世陶磁器は溝内からの出土が最も多かった。

発掘調査区は用水と畦畔で4つのブロックに区切り、北西側調査区をA区とし、順にB区、C区、D区とした。

第2節 遺構と遺物

遺構

SK1 A区西端で検出した。一辺6.7m、大部分は調査区外に伸びているため明確な長さ及び面積は不明である。東辺の長さは6.7mで、検出面からの深さは約13cm～28cmで上層より土師器片が数点出土している。

SK1 A区SK1より30m程北に離れた場所で検出した。長辺約155cm×短辺約85cmの隅丸長方形で、北側で一段低くなる。穴内部に小ピットが1個見られる。ピットの深さは23cmである。遺物は出土していないが、中から人為的に投げ込まれたと思われる人頭大の自然石が大量に見つかった。

SK2 A区西SK1の東隣で検出した。長辺約215cm×短辺約100cmの不定形プランである。西側にテラスをもち、テラスの深さは最深部は27cmである。東南隅の突出したピットは土坑とは別の遺構と思われる、やや歪な長方形プランをもつ。SK1同様遺物は出土していないが、大量の自然石が堆積していた。

SK3 A区SK1南で検出した。長辺約88cm×短辺約70cmの楕円形で深さは地山から約20cmである。縄文土器1が出土している。

SK4 A区SK3の南隣で検出した。長辺約190cm×短辺約110cmで深さは約30cmである。2cm～30cm大の自然石が多量に埋まっていた。遺物は珠洲のすり鉢2が出土している。

SK5 A区SK4の南隣で検出した。長辺約150cm×短辺約110cmで内部にテラスをもっている。深さは最深部で38cmであった。SK4同様に人頭大の石礫が多量に見つかった。土層断面から最初にテラス部を掘削し、その穴が堆積した後、東隣でさらに深い穴が掘られたことが分かった。後者に掘られた穴とSK4は土色や石の堆積状況が似ていることから同時期のものと考えられる。

SK6 A区SK4の東で検出した。長辺約210cm×短辺約140cmの不定形プランで、中には数段のテラスが見られる。ピット部は39cmであった。

SK7 B区中央よりやや西に位置する。長辺190cm×短辺約65cm～100cmで両側にテラスをもち、中央の深さは36cmを測る。

SK8 B区西南で検出した。不定形プランで内部にビットが3基存在する形状となった。深さは17cm～26cmで縄文土器3～7が出土している。中央にあるビットはSK1、SK2等と同様多量の自然石を含有していた。

SK9 B区中央から東寄りに位置している。長辺約150cm×短辺約80cm、深さ18cmの歪な長方形をしている。内部にビットが1基見られる。ビットの深さは23cmを測る。

SK10 C区ほぼ中央に位置する。長辺約140cm×短辺約90cmで、北側に浅いテラスを設ける。最深部は16cmである。

SD1 A区の北西側を東西に走る溝で、SIIの北をかすめ東方のSD2にぶつかって終わる。幅約40cm～60cmで、確認できた長さは24.5mであった。遺物は中世のものと思われる土師器片8～9が出土している。後述するSD2とは直交する。

SD2 A区からB区にかけて横切の形で、南北に走る溝である。幅約60cm～100cmで長さは確認できた長さで35mであった。深さ約7cm～36cmで覆上には5cm～10cmの礫が多量に含まれていた。遺物は中世のものと思われる青磁碗、珠洲のすり鉢、土師器皿等が出土している。

P1 B区北西に位置する。長辺約100cm、短辺約25cmの歪な楕円形をしている。両側にテラスをもち中央の深さは20cmであった。縄文土器17が1点出土している。

P2 C区南壁際に位置する。深さは最深20cmで犬目茶碗18が出土している。

遺物

SK3 1は縄文の無文土器で外面に弱いミガキがかかっている。

SK4 2は珠洲のすり鉢で口縁内面には波状紋が見られる。また僅かではあるが卸目が一部確認できる。吉岡編年のV期～VI期と思われる。

SK8 3～7の縄文土器が出土した。3は緩い波状口縁で、外面には煤が付着している。焼成後に内外面両方からの穿孔による補修孔が確認できる。口唇部にはLR縄文が施されている。4も口縁端部には3と同様LR縄文が施されている。5は体部片にあたり、外面にRL縄文が施されている。本土坑から同一と思われる破片が数点出土したが、接合はできなかった。6は深鉢の底部で外面にはRL縄文が施されている。外底面は摩耗が著しいが網代圧痕が確認できる。5と同一個体の可能性がある。7は深鉢の底部で網代圧痕が確認できる。接合はしないが3と同一個体の可能性がある。

SD1 8は越前の甕である。小片のため口径は定かではないが60cm以上になり、大型の部類になると思われる。14C中頃～後半のものと思われる。9は土師器の皿で内外面共ナデを施し口縁は一段のヨコナデを施す。10は珠洲の甕体部である。

SD2 11・12は珠洲のすり鉢で11は口縁端部内側に波状紋が確認できる。14C前半のものと思われる。12は5本の卸目が確認でき14C代のものと思われる。13は珠洲のすり鉢で、胎土に海面骨針が見られる。内面のナデ調整の際についたと思われる筋が多数残っている。14は土師器の皿で、口唇部に灯心油痕が確認できる。同一個体と思われるものが数点あったが接合できなかった。15は瀬戸の犬目碗で内外面は鉄釉が施されており、底部外面は露胎している。15C前半のものと思われる。16は青磁の碗で両外面に貫入が見られる。15C前半のものと思われる。

P1 17は縄文土器深鉢の体部である。外面にのみ煤が付着している。

P2 18は犬目茶碗の口縁で口唇部は尖った作りになっている。内外とも鉄釉が施されている。中国製のものと思われる。

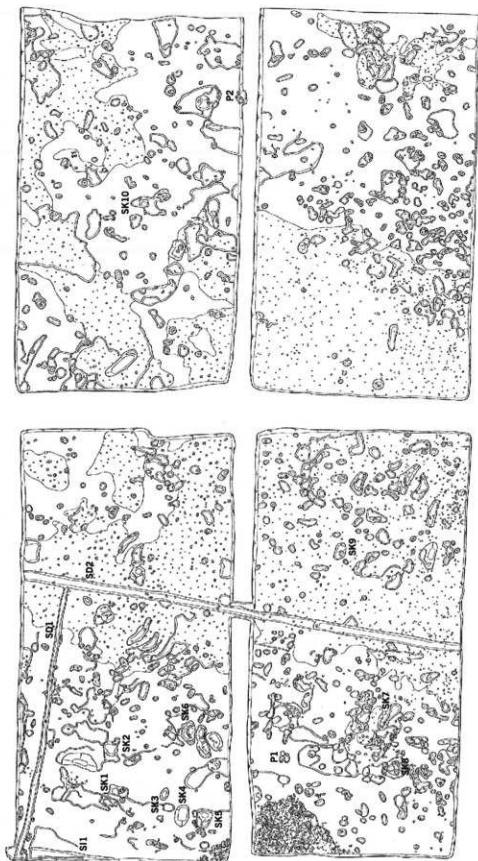
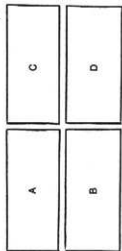
包含層 19は縄文土器の深鉢の口縁で、外面にはLR縄文が施されている。口唇部はナデ調整で胎土

には海綿骨針が含まれている。20は縄文土器の深鉢の口縁で内外面ともミガキがかかっている。口縁は若干内湾して体部に続いている。21は越前甕の頸部付近の破片で外面に刻印が見える。22は土師質の土器であるが、器種は破片であるため不明である。外面には凹線が1条見え、ヘラ状工具のヨコナデの痕が残っている。内外面には煤が付着している。23は土師器の皿で、口縁のみの出土であった。内外面に煤が付着している。中世のものであろう。24は染付の碗で底部外面には圏界線を3条描いている。

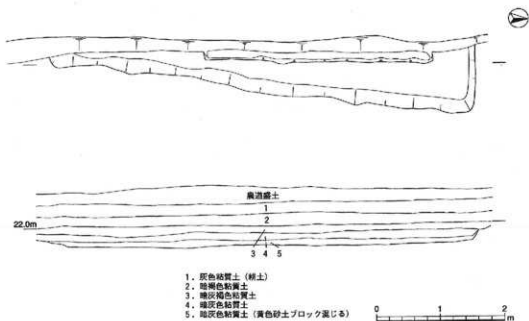
石製品・鉄製品

25は蕨石類である。26～29は打製石斧で25がSK5、26がSK9、27・28が包含層より出土している。30・31は鉄滓で30は椀形滓で、31は木炭痕が残っている。

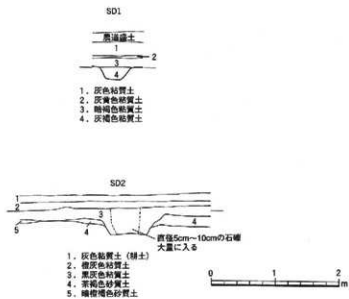
4



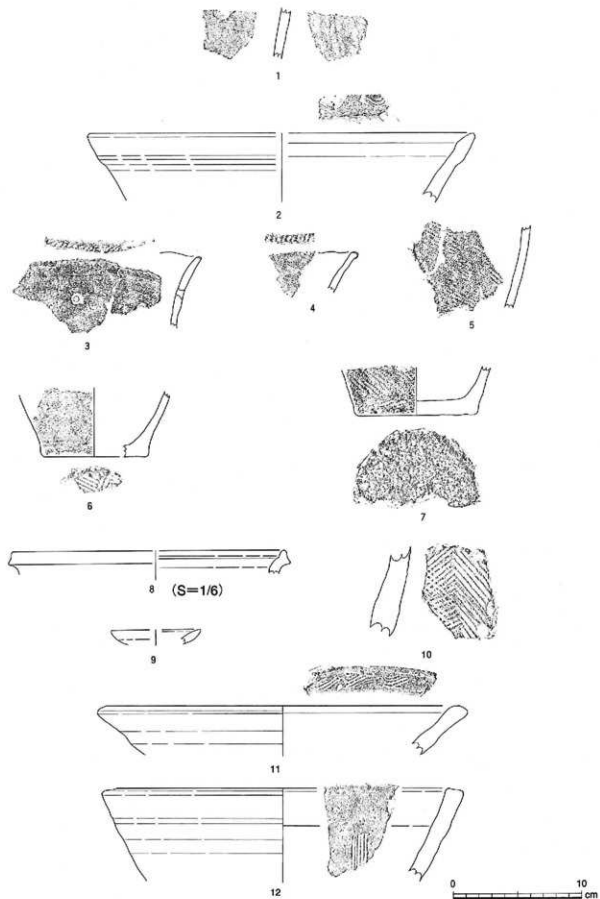
第28図 富樫館跡ヶ窪地区調査区全体図 (S=1/300)



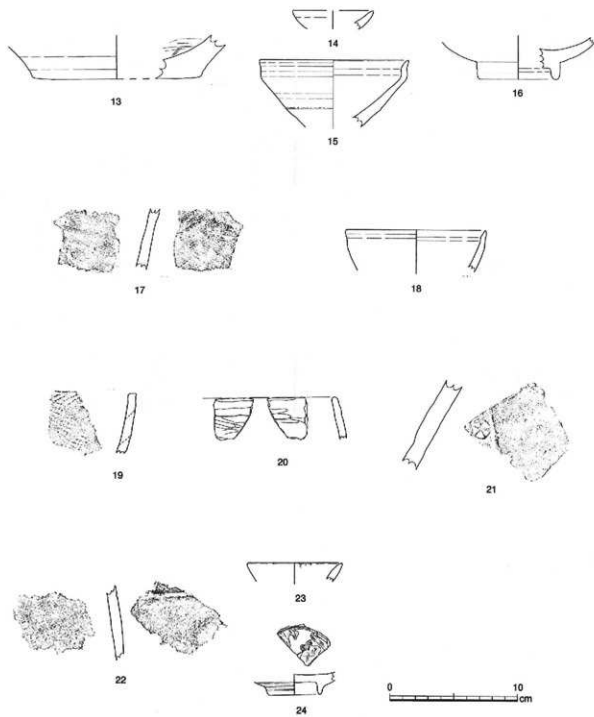
第29図 S11平面図・断面図 (S=1/60)



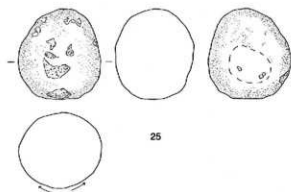
第30図 SD1・SD2 断面図



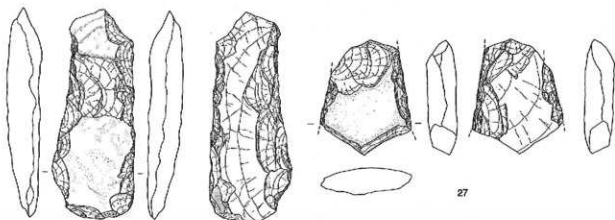
第32図 SK3・SK4・SK8・SD1・SD2 出土遺物実測図 (S=1/3)



第33图 SD2·P1·P2·包含层出土遗物实测图 (S=1/3)

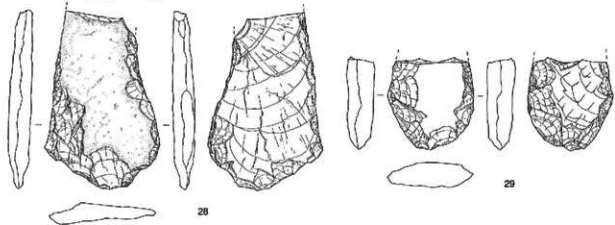


25



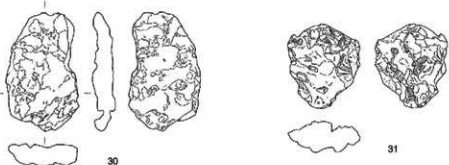
26

27



28

29



30

31



第34図 石製品、鉄製品実測図 (S=1/3)

第3節 小結

縄文時代の遺物は包含層よりの出土が何点も見られるが、遺構からの出土はSK3、SK8のみにとどまった。SK8からは比較的まとまった量の土器が出土している。石製品ではSK5から燧石、SK9・地山直上からは打製石斧が出土している。野々市町周辺では、この様に縄文時代の遺構は確認されるが居住区域は確認されず、遺物の点数も極めて少ない、という遺跡をよく見かける。この結果は本遺跡だけでなく、平成3年度調査の粟田遺跡や、平成7年度調査の清金アガトウ遺跡等でも確認されている。

中世の主な遺構は竪穴状遺構、東西・南北を走る溝、石が大量に入った上坑などであった。時期は14世紀から15世紀前半である。これらの遺構はA区とC区を横断するSD2を境に西側に集中する。SD2から東は人為的に掘削した穴はほとんど無く、地山面は石礫が主体となる。この様な形状をもつ調査区東側3分の2は人の手の加わっていない荒地であったようである。

SD2より西側のエリアを見ていく。A区西北側にはSD2と直交する東西ラインのSD1が走る。SD1はSD2と交わったところで完結しており、他遺構の配置状況等から両溝屋敷割による区画溝と考えられる。屋敷の大きさは溝がそれぞれ調査区外に伸びるため具体的な範囲を示すことはできない。本調査の成果として東西25m以上、南北30m以上の規模をもっている。

屋敷内にあたるC区北西隅には地山面である石礫がむき出しになって顔を出している。その上には黄色のブロック土の混じった暗灰色の上が石を隠すように覆っていた。これは屋敷地内を整地する目的で敷いた土と考えられる。

屋敷地内の遺構を見ていくと土坑が数基、竪穴状遺構が1基見られる。土坑が長方形をしたものが多く、大量の自然石を投げ込んで埋めたものが4基確認される。土坑の用途、石を入れる理由はよく分からない。掘立柱建物は確認されておらず、居住域は西側調査区外に存在すると思われる。本調査区から80m進んだところに近世に野々市と鶴来を結んでいた馬替道と呼ばれる街道が走っていた。この道が中世までさかのぼるかは検討を要するが、道路に面して屋敷地を形成していたことが伺える。

富樫館跡は本調査地から北へ250m進んだところに位置する。本格的な富樫館跡の発掘調査は平成元年度からであるが、小規模な面積の調査が多いため詳細な館の位置は不明であった。平成6年度の調査で堀の一部が見つかり、ようやく館の場所がはっきりしてきた。館の周辺部でも発掘調査が継続的に行われ、中世所産の遺構・遺物が発見されている。今回確認した屋敷地も富樫館に付随する町割りのひとつと考えられ、守護城下町の都市構造のあり方を示す資料として非常に興味深い。

第5表 鬼ヶ窪地区遺物観察表

土器・陶磁器観察表

No	出土地点	器種	法量(mm)			色調(内) (外)	調整(内) (外)	遺存	備考
			口径	底径	器高				
1	SK 3	縄文 体部				にぶい橙色 ☆	ヨコナデ ミガキ		
2	SK 4	珠洲 摺鉢				灰色 ☆	ロクロナデ ☆	口縁1/8	口縁内面に 波状紋
3	SK 8	縄文 口縁				灰黄褐色 黒褐色～にぶい黄褐色		口縁小片	外面煤付着 端部に縄文
4	SK 8	縄文 口縁				にぶい黄褐色～黒褐色 にぶい黄褐色		口縁小片	端部に縄文
5	SK 8	縄文 体部				にぶい橙色 ☆		体部小片	
6	SK 8	縄文 深鉢		96		にぶい黄褐色～褐灰色 にぶい黄褐色～褐灰色		底部1/2	底部圧痕
7	SK 8	縄文 深鉢				にぶい黄褐色～褐灰色 褐灰色～にぶい黄褐色			底部網代圧痕
8	SD 1	越前 甕				にぶい橙色 ☆			
9	SD 1	土 皿				橙色 ☆	ナデ ☆	口縁1/9	
10	SD 2	珠洲 甕				灰色 ☆		体部小片	
11	SD 2	珠洲 摺鉢	290			褐灰色 ☆	ロクロナデ	口縁1/9	口縁内面に 波状紋
12	SD 2	珠洲 摺鉢	284			灰色 ☆	ロクロナデ ☆	口縁1/12	
13	SD 2	珠洲 摺鉢				にぶい黄褐色 ☆	ロクロナデ	底部1/2	海面骨針
14	SD 2	土 皿	63			にぶい橙色 ☆	ナデ ☆	口縁1/9	口縁外面に 灯明油痕付着
15	SD 2	瀬戸美濃 天日鍋	116			褐色黒～褐色 褐色～黒色～浅黄褐色	底部付近ケズリ	口縁1/12	内外両面に 鉄軸
16	SD 2	青磁 碗	62			オリーブ灰色 ☆		口縁1/4	高台外面に 軸なし
17	P 1	縄文 深鉢				にぶい橙色 ☆		体部小片	外面に煤付着
18	P 2	瀬戸美濃 天日鍋	110			灰褐色～にぶい赤褐色 ☆		口縁1/12	中国製 内外両面鉄軸
19	包含層	縄文 深鉢							海面骨針
20	包含層	縄文 深鉢				にぶい橙色 ☆	ミガキ ☆	口縁1/36	
21	包含層	越前				にぶい赤褐色 灰褐色		体部小片	刻印
22	包含層	縄 体部				にぶい橙色～褐灰色	ヨコナデ ☆	体部小片	外面煤付着 外面凹線1条
23	包含層	土 皿	74			にぶい橙色 ☆	ヨコナデ ☆	口縁1/9	灯明油痕
24	包含層	磁器 碗	40					底部1/3	内外面に 透明釉

石器・鉄器観察表

No	出土地点	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質及び備考
25	SK 5	敲石	72	65.5	61	400	
26	SK 9	打製石斧	167	65	27	344	
27	SK 2	打製石斧		21			
28	包含層	打製石斧		90.5	18	245	
29	包含層	打製石斧		68	22	145	
30	包含層	鉄滓	94	58	18	145	
31	包含層	鉄滓	67	57	25	120	



調査区遠景（西から）



調査区近景（東から）



埋設土器検出



埋設土器



小穴群 (西から)



小穴群 (東から)



SD02.03.04.05 検出 (南から)



SD05 (北から)



SD05 (南から)



SD05 断面 (北から)



SD05 (西から)



周溝状遺構 (北から)



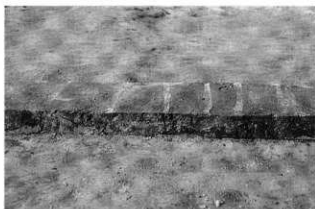
遺構検出



SX03 畝間溝検出 (南から)



SX03 断面 (北から)



SX03 断面 (南から)



遺構完了 (南東から)



SX03 北断面 (北から)



SX04 北半 (北から)



SX04 南半 (北から)



SX04.SD04b (南から)



SX04.SD04b 断面



SX04 断面



SX04.SD04b 断面



SX03.SX04.SD04 (北から)



SX03.SX04.SD04 断面 (北から)



SD03.04 検出 (北から)



SD04B 断面



SD04A 断面 (西から)



SD04B 断面 (西から)



SD04C 断面 (西から)



SD04 完掘 (西から)



SD08.09.10 検出



SD08.09.10 完掘



SD11 断面D (南から)



SD11 断面E (南から)



SD09 遺物出土状況



SD09 遺物出土状況



SD11 (1999)



SD11.13 完掘 (1999)



SD13 完掘 (北から)



SD01 断面C



SD01とSD11 (東から)



SD01 断面A (南から)



SD01 断面A (南から)



SD02 断面 (西から)



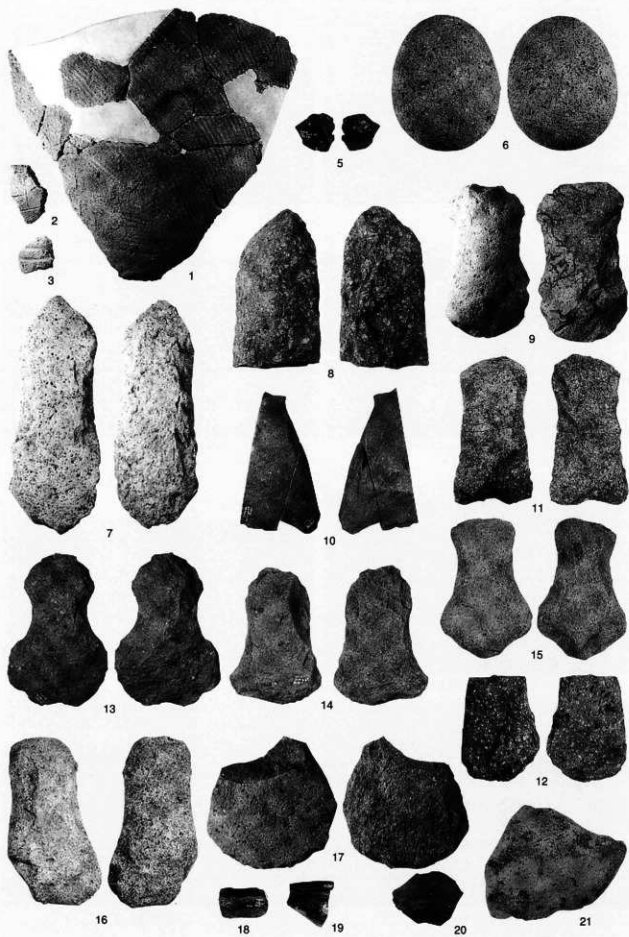
SD02.06

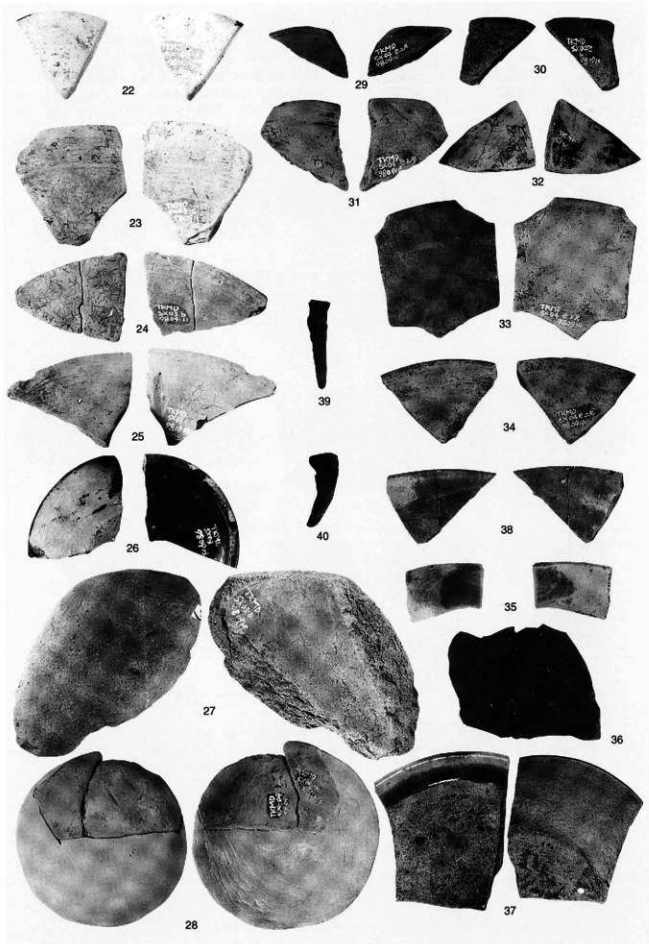


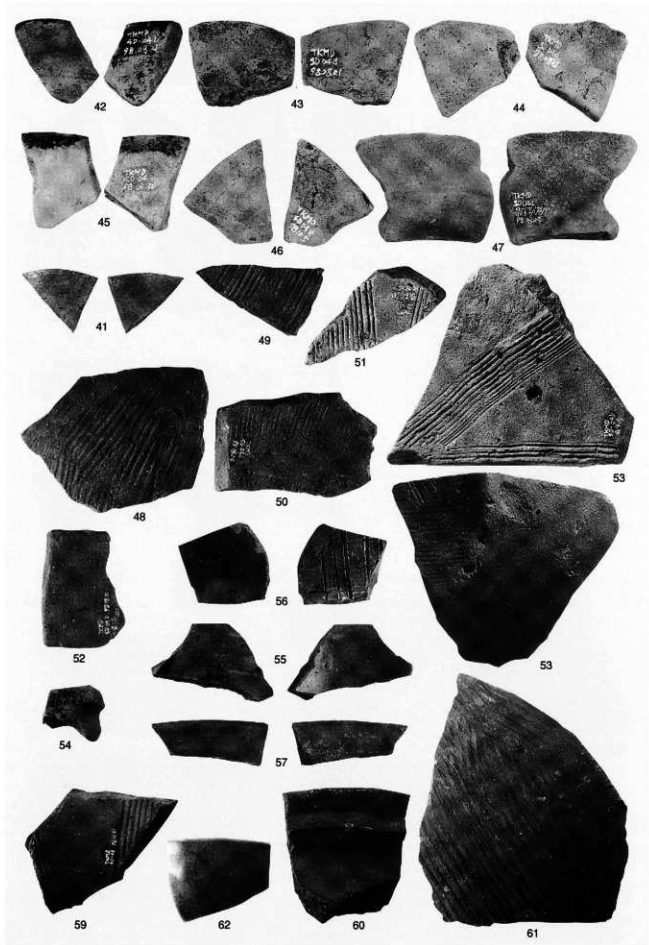
中学生職場体験

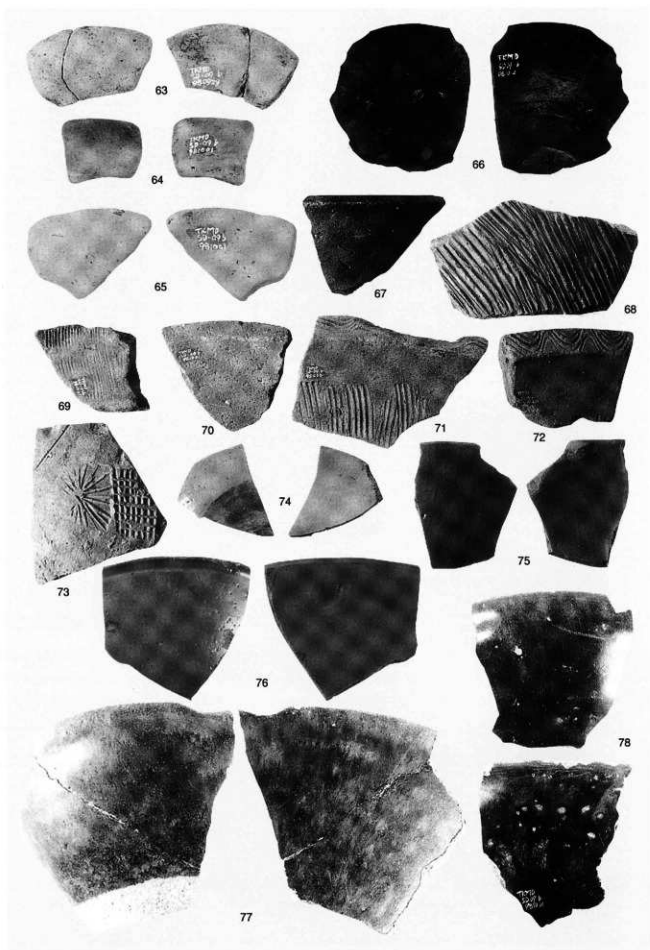


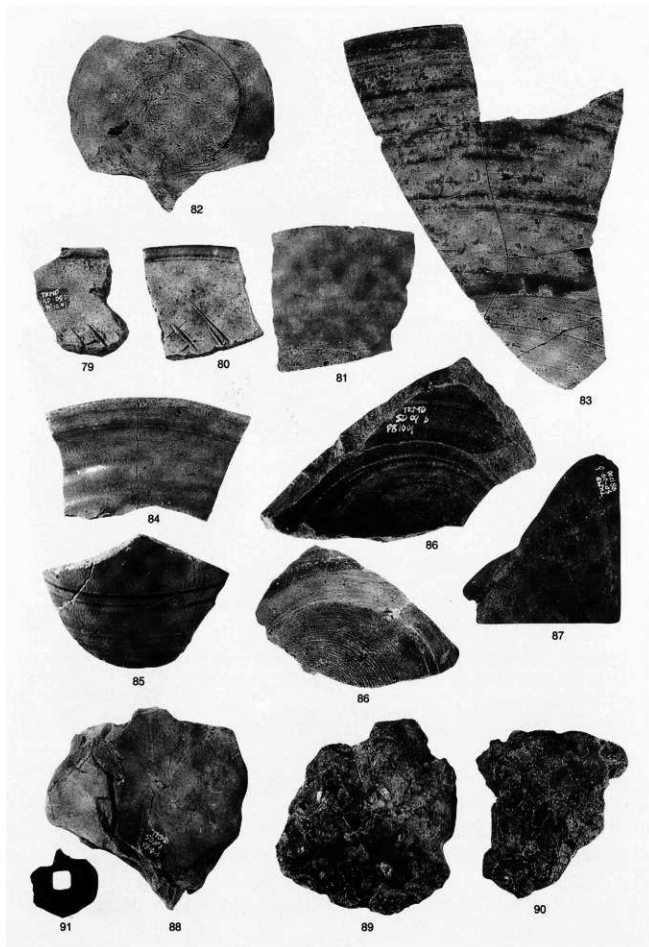
調査風景

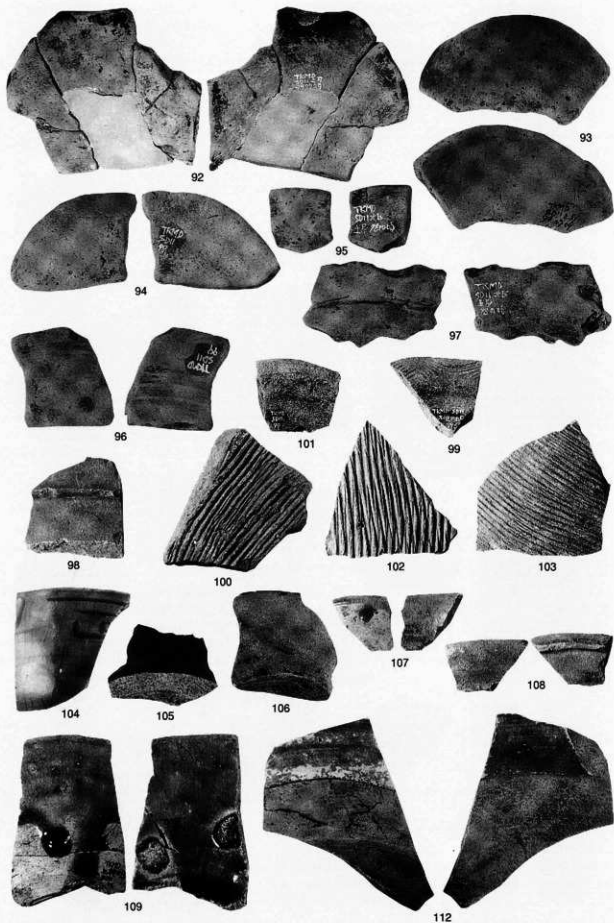


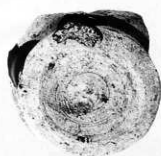




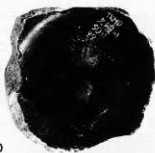








110



111



113



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



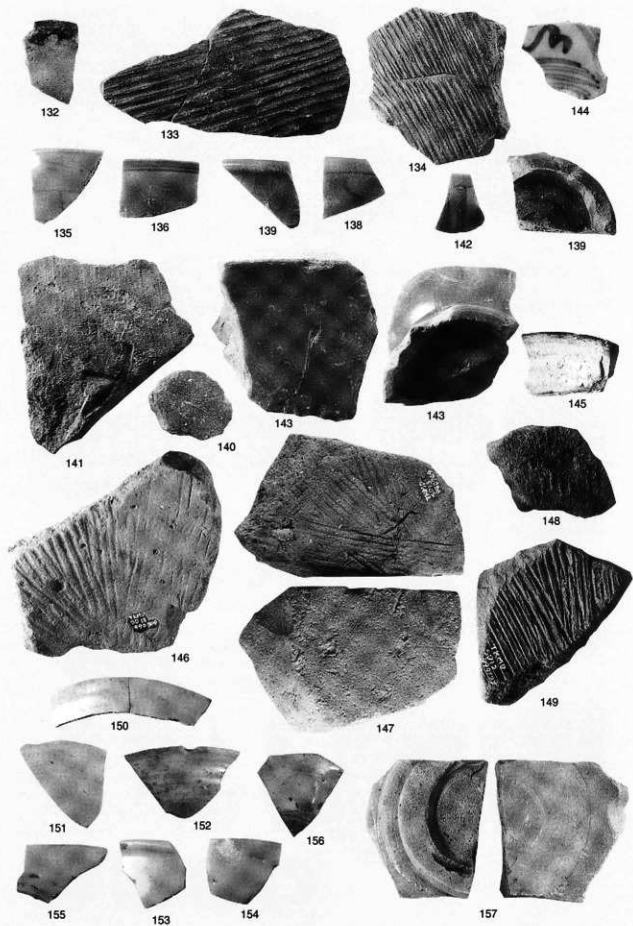
130

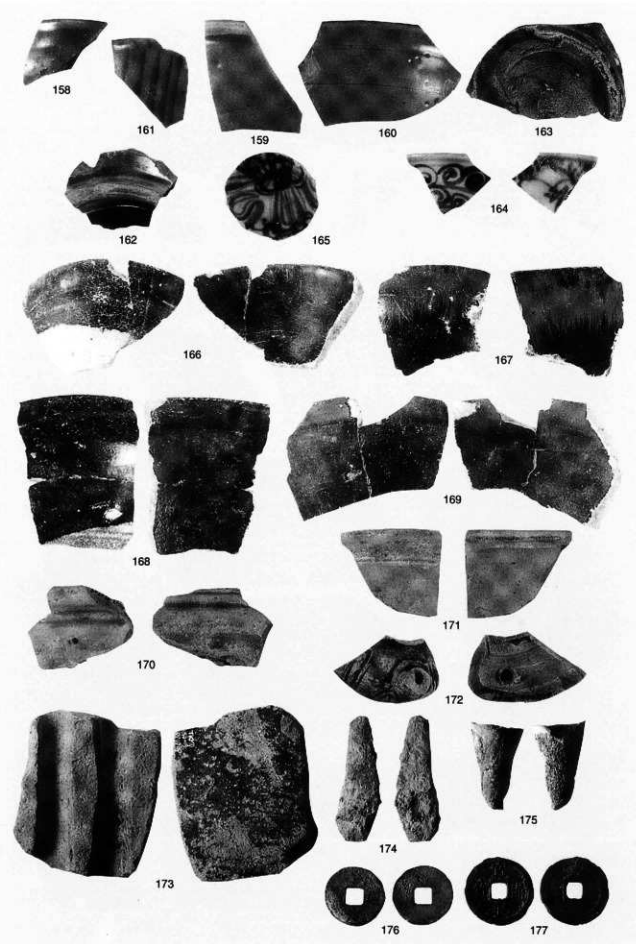


131



132







SI1



SK2 完掘後



SK1



SK3 SK4



SK1 完掘後



SK5



SK2



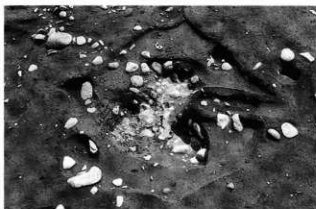
SK7



SK8 土器出土状況



SD1



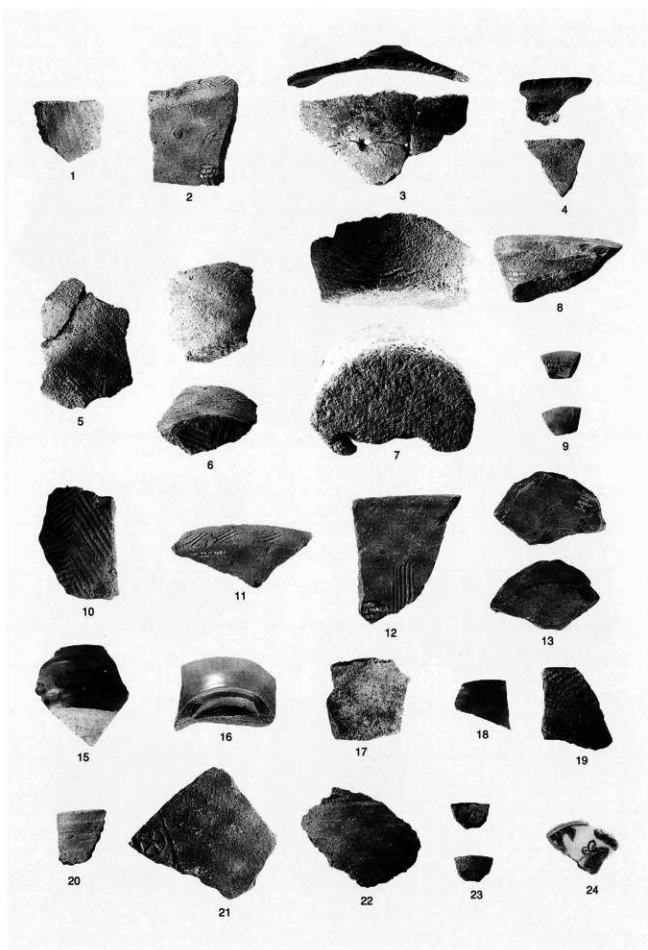
SK8 完掘後



SD2



調査区航空写真





25



26



27



28



29



30



31

報告書抄録

ふりがな	とがしかんせきまむしどいちく とがしかんせきおにがくぼちく							
書名	富樫館跡蝮土居地区 富樫館跡鬼ヶ窪地区							
副書名	扇が丘住吉土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	徳野裕子 布尾和史							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5-4-1 Tel: 076-248-8545							
発行年月日	西暦 2001年3月30日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トガシカンセキマムシドイチク 富樫館跡 蝮土居地区	トガシカンセキマムシドイチク 野々市町 扇が丘	17344	16039	36° 31' 30"	136° 37' 30"	1998.7~ 1998.10 1999.5~ 1999.9	3,570㎡	区画整理
トガシカンセキマムシドイチク 富樫館跡 鬼ヶ窪地区	トガシカンセキマムシドイチク 野々市町 住吉	17344	16039	36° 31' 30"	136° 36' 00"	1996.5 ~ 1996.10	2,300㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
富樫館跡 蝮土居地区	館跡	中世		溝状遺構 畝状遺構		中世陶磁器		
富樫館跡 鬼ヶ窪地区	館跡	中世		土抗		中世陶磁器		

扇が丘住吉土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

富樫館跡 蝮土居地区 富樫館跡 鬼ヶ窪地区

発行日 平成13年3月30日

発行 野々市町教育委員会
〒921-8815
石川県石川郡野々市町本町5-4-1

印刷 アサヒヤ印刷

